モノグラフ・高校生'92

vol.35 高校生たちのおしゃれ

静岡大学教授　深谷昌志

目次

本報告書の要約 …… 2

第Ⅰ章　どんなタイプか

1．おしゃれなほうか …… 4

2．気に入っていること …… 8

「おしゃれ」についてのメモ(1)

・高校生だった頃 …… 西岡知子　12

・おしゃれな先生へのあこがれ …… 安田佳代　13

・おしゃれの思い出 …… 山元ゆかり　14

第Ⅱ章　髪や服装へのこだわり

1．朝シャンをしているか …… 16

2．髪に満足しているか …… 20

3．着るもののおしゃれ …… 23

第Ⅲ章　自分の体型について

1．やせているほうか …… 27

2．理想的な体型 …… 30

3．ダイエットへの思い …… 35

「おしゃれ」についてのメモ(2)

・高校生とダイエット …… 岩田由紀子　39

・娘たちのおしゃれ …… 鈴木明美　41

・おしゃれと自己主張 …… 尼子孝子　43

第Ⅳ章　おしゃれと自己像

1．どんなタイプか …… 46

2．おしゃれの意味 …… 51

資料1　調査票見本 …… 57

資料2　学年・性別集計表 …… 68

＊おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。

本報告書の要約

① おしゃれなタイプか

おしゃれだと思っている生徒は6％だが、まったくおしゃれでない生徒も12％で、その他はあまりおしゃれでない生徒が45％になる（p.6 図1）。

② 毎日シャンプーしているか

毎日シャンプーしないと気持ちが悪いという生徒は、「とても」の45％に「かなり」の29％を含めると74％に達する（p.18 図10）。

③ 髪に満足しているか

髪に対する満足感は、「とても」や「かなり」は少なく、「やや満足している」にとどまっている（p.21 図16）。

④ ジーンズを選ぶとき

好きなデザインで着やすいものを選ぶ者が多い（p.23 図18）。

⑤ やせているほうか

太っていると思っている生徒は男子では21％にとどまっているが、女子は52％に達する（p.29 図24）。

⑥ 体型に満足か

体型について不満なのは、男子の54％、女子の83％に達する（p.30 図26）。

⑦ 理想の体型

男子の理想は体臭がなく、身長の高いタイプ、女子の理想も体臭がなく、バストの大きなタイプ（p.32 図28、p.34 図30）。

⑧ ダイエットしているか

男子の中でダイエットをしている者は5％だが、女子の71％がダイエットに関心をもち、23％がダイエットをしている（p.36 図32）。

⑨ 自分のタイプとおしゃれ

おしゃれなタイプのほうが音楽好きで友だちが多いなど、明るい自己像を抱いている（p.53 図45）。

〔付記〕

おしゃれの問題はかねてから扱ってみたいテーマだった。しかし、筆者も含めて、頭の固い旧世代－年齢に関係なく－の人間の多い同人では、このテーマは扱いにくいと思った。そこで、学生たちと母親－といっても、いずれも教育社会学や児童学の専攻－に協力を求めることにした。1年近くの間、何回も会合をもち、プリテストを重ね、やっとでき上がったのが、今回の調査票である。研究協力者として、さまざまな面で調査票作りに力をかしていただいた人たちに感謝の気持ちを述べておきたい。

以下の9名のうち、6名の学生たちは、平成4年3月、それぞれの職を得て、学窓を巣立っていった。また、放送大学卒業生はいずれも筆者のもとで卒業論文を書いた後、研究会を作って、中・高校生のテーマを掘り下げようとしている人たちである。

山元ゆかり（東京学芸大学4年生）
西岡　知子（東京学芸大学4年生）
安田　佳代（東京学芸大学4年生）
飯島　紹子（上智大学4年生）
日野　みほ（上智大学4年生）
田尻　彰子（上智大学4年生）
岩田由紀子（放送大学卒業生）
尼子　孝子（放送大学卒業生）
鈴木　明美（放送大学卒業生）

（カッコ内は平成4年3月現在）

〔調査概要〕

対象●宮城県・東京都・広島県・愛媛県の普通科公立高校の1～3年生1,509名

時期●1991年10月～11月

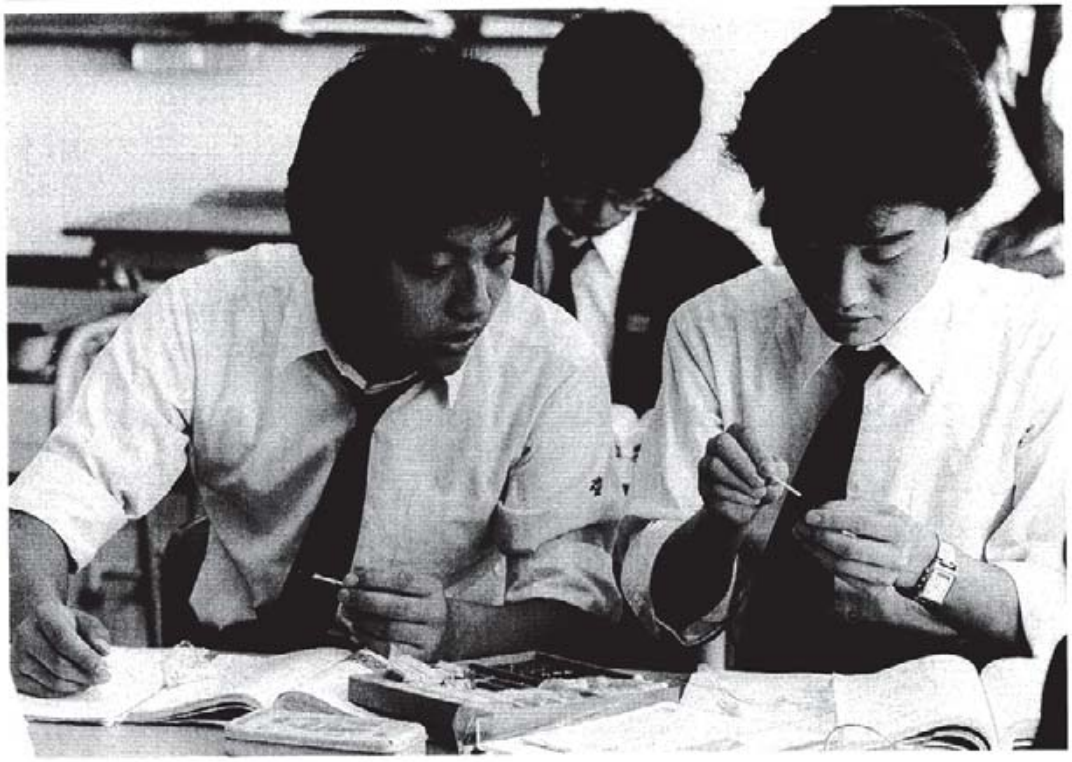
方法●学校通しによる質問紙調査

サンプル構成

（人）

学年＼性別	男子	女子	計
1年	560	574	1,134
2年	154	105	259
3年	62	54	116
計	776	733	1,509

第Ⅰ章 どんなタイプか



1．おしゃれなほうか

おしゃれのデータにふれる前に、まずサンプルの概要を紹介しておこう。

まず、部活動は**表1**のように、運動部に積極的に参加している者が45％と、半数に迫っている。

高校生についてのデータを羅列する感じになるが、小遣いの額は平均して5,000円前後に集中している(**表2**)。また、アルバイトについても、いつもしている者は7％にとどまり、していない生徒が93％に達する(**表3**)。したがって、多くの生徒はほぼ5,000円くらいの小遣いの中で、おしゃれを楽しんでいるのであろうか。

なお、卒業後の進路は**表4**が示すように、3分の2が中堅の4年制大学への進学を望んでいる。こうしたデータから明らかな通り、本サンプルは標準的な進学校を中心にサンプルを選んだ。

それでは、生徒たちは自分をおしゃれだと思っているのだろうか。生徒たちに自己評価を求めたところ、**図1**のような結果が得られた。「とても」「かなり」おしゃれだと思っている生徒は6％弱だが、かといって、「まったくおしゃれでない」も12％にとどまっている。そして、82％は「ややおしゃれ」か「あまりおしゃれでない」に属している。

さらに、**図2**に掲げた属性別の分析では、女子のほうがややおしゃれで、男子はおしゃ

れでない生徒が65%と、3分の2に迫っている。また、学年を追ってみると、学年が上がるにつれて、高1の55%から高2の63%、高3の65%のように、おしゃれでないという生徒の割合が高まる。受験学年になるにつれて、おしゃれなどしていられない気分になるのであろうか。それとも、おしゃれの自意識が高くなって、客観的にはおしゃれでも、自分くらいではおしゃれとはいえないと思うようになるのであろうか。

なお、**表5**によれば、大学進学を考えている生徒ほど、自分をおしゃれでないと思っている割合が高い。ということは、大学進学という目標があるので、おしゃれに心がまわらないのであろうか。

表1　部活動

(%)

	全体	男子	女子
入っていない	27.3	29.0	25.5
運動部・積極的参加	44.7	48.5	40.5
運動部・サボりぎみ	8.4	8.6	8.2
文化部・積極的参加	13.0	9.4	16.9
文化部・サボりぎみ	6.6	4.5	8.9

表2　小遣い

(%)

約3000円	30.6
約5000円	44.6
約7000円	11.6
約10000円	7.1
10000円以上	6.1

表3　アルバイトの収入（1か月）

(%)

していない	92.9		
している	7.1	0 ～ 10000円	31.0
		11000 ～ 15000円	10.0
		16000 ～ 20000円	13.6
		21000 ～ 30000円	16.4
		31000 ～ 40000円	10.9
		41000円以上	18.1

表4　進路

(%)

	全　体	男　子	女　子
高校卒業後就職	2.1	3.1	1.1
短期大学	4.8	0.3	9.6
専修・専門学校	5.0	4.7	5.4
中堅の4年制大学	66.5	67.6	65.1
難関の4年制大学	21.6	24.3	18.8

図1　おしゃれの自己評価

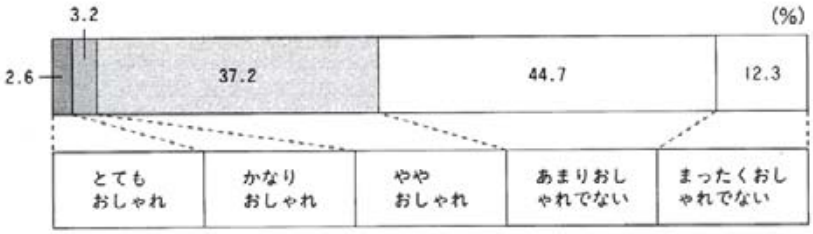
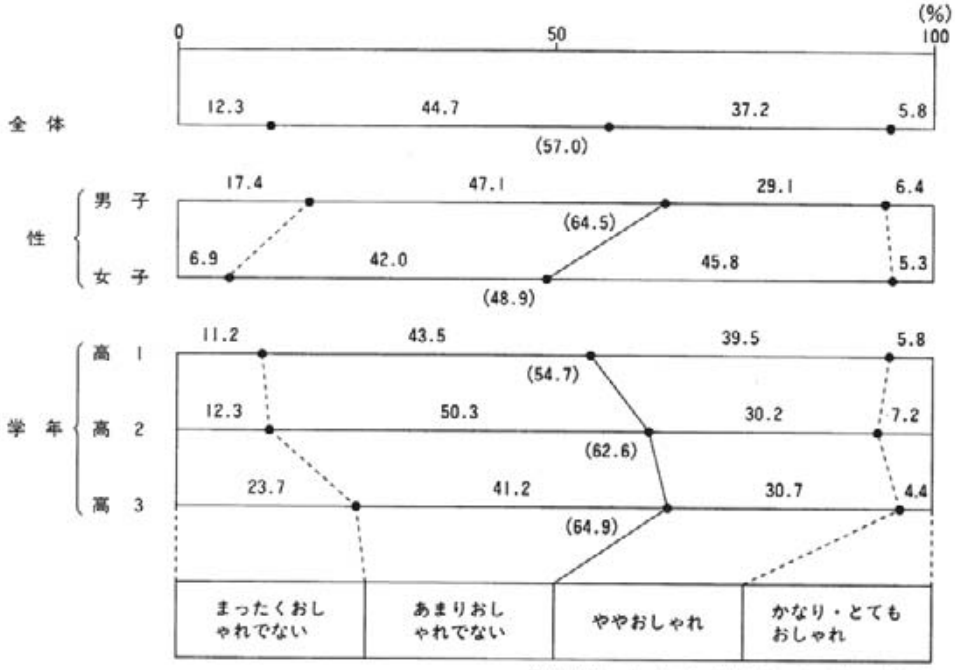


図2　おしゃれの自己評価 × 属性



(( )は「まったく＋あまりおしゃれでない」割合)

表5　進路 × おしゃれの自己評価

(%)

	おしゃれ			おしゃれでない	
	とても	かなり	やや	あまり	まったく
専修・専門学校	4.2	6.9	41.6	29.2	18.1
	11.1			47.3	
短期大学	0.0	1.4	61.0	33.3	4.3
	1.4			37.6	
中堅の4年制大学	1.6	3.4	36.6	46.7	11.7
	5.0			58.4	
難関の4年制大学	5.1	2.9	34.9	42.4	14.7
	8.0			57.1	

2．気に入っていること

いずれにせよ、多くの生徒たちは少なくとも、自分はそれほどおしゃれでないと答えている。そうはいっても、けっこうおしゃれな高校生が多いような印象を受けるが、生徒たちはおしゃれの中でも何が気に入っているのであろうか。

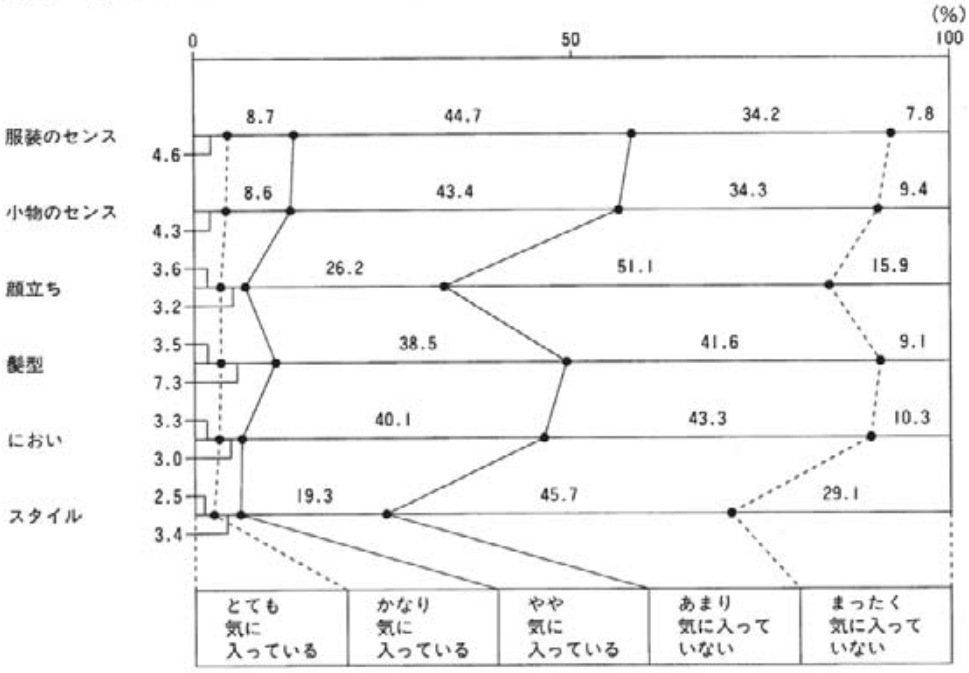
図3に示すように、生徒たちは服装や小物を「やや気に入っている」程度で、その他のことは「かなり気に入っている」とはいえないという。それほど「気に入っている」わけではないが、もちろん気に入らないわけではないという反応なのであろう。

なお**図4**によれば、男子より女子のほうが自分の服装のセンスや小物のセンスを気に入っているという。しかし、学年別に調べてみると、気に入っている割合は高1から高3になっても、ほとんど変化していない（**図5**）。おしゃれの感覚は、学年が変わったからといって、大きく変化しないのであろうか。

いずれにせよ、多くの生徒たちは、自分はそれほどおしゃれでないと思っている。たしかにおしゃれに見える生徒でも、それほどおしゃれだと思っていないようだ。せいぜい身だしなみに気をつけている程度なのであろう。

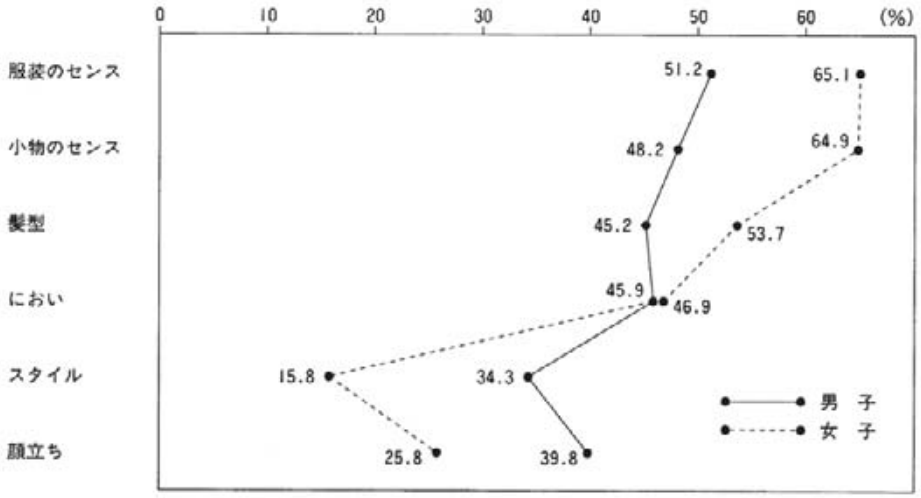
それでは具体的に、どんなところに気をつけているのであろうか。**図6**から明らかなように、外へ出るときはきちんとした服装をする者が7割に迫っている。そして、そうした服装をきちんとする者は男子より女子のほうに多い（**図7**）。また、学年別については、どちらかというと、高3よりも高1のほうが、きちんとしている割合が高い（**図8**）。

図3　気に入っているか



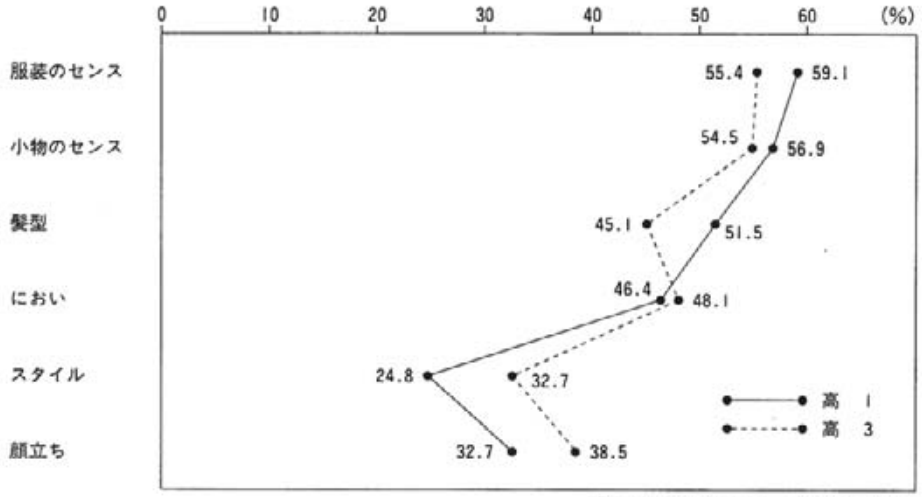
こう見てくると、高3の場合、やはり受験が迫ってきて、おしゃれなどに気をまわせなくなるというのが実情なのであろうか。それとも、全体として、どの生徒も身だしなみに気をつかうようになって、それだけにおしゃれとはいえないと思うようになったのであろうか。

図4　気に入っているか × 性



(「とても～やや気に入っている」割合)

図5　気に入っているか × 学年



(「とても～やや気に入っている」割合)

図6　あてはまるもの

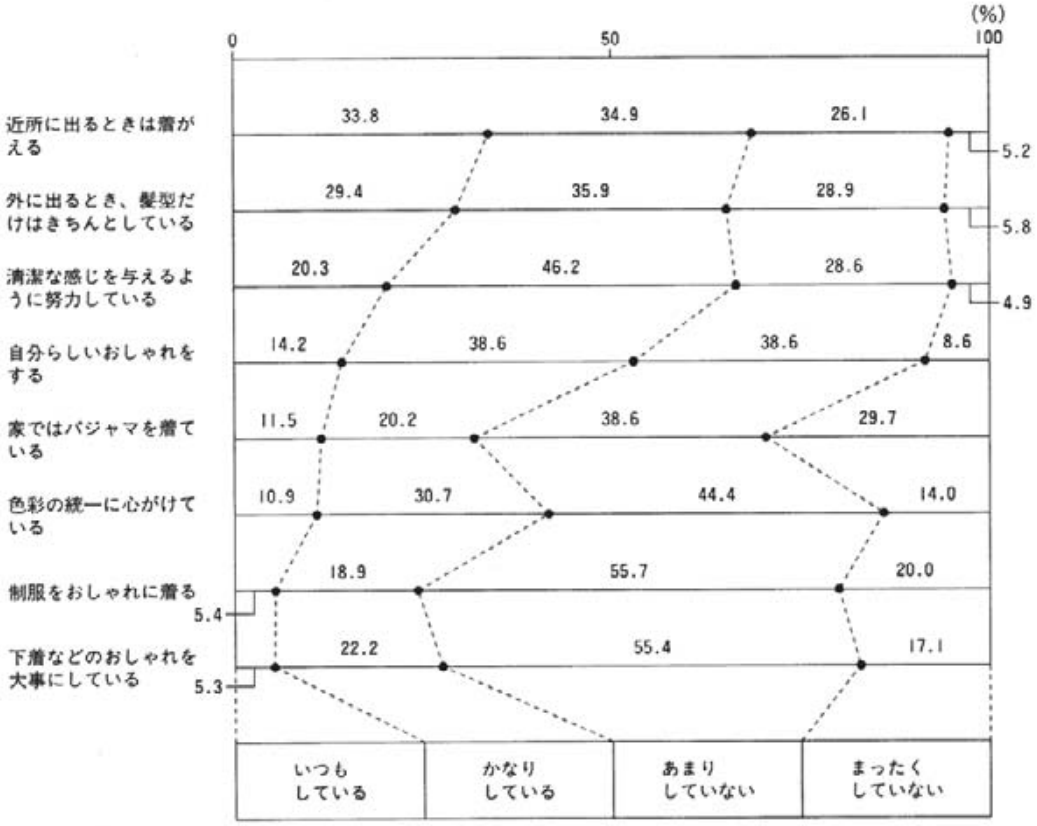
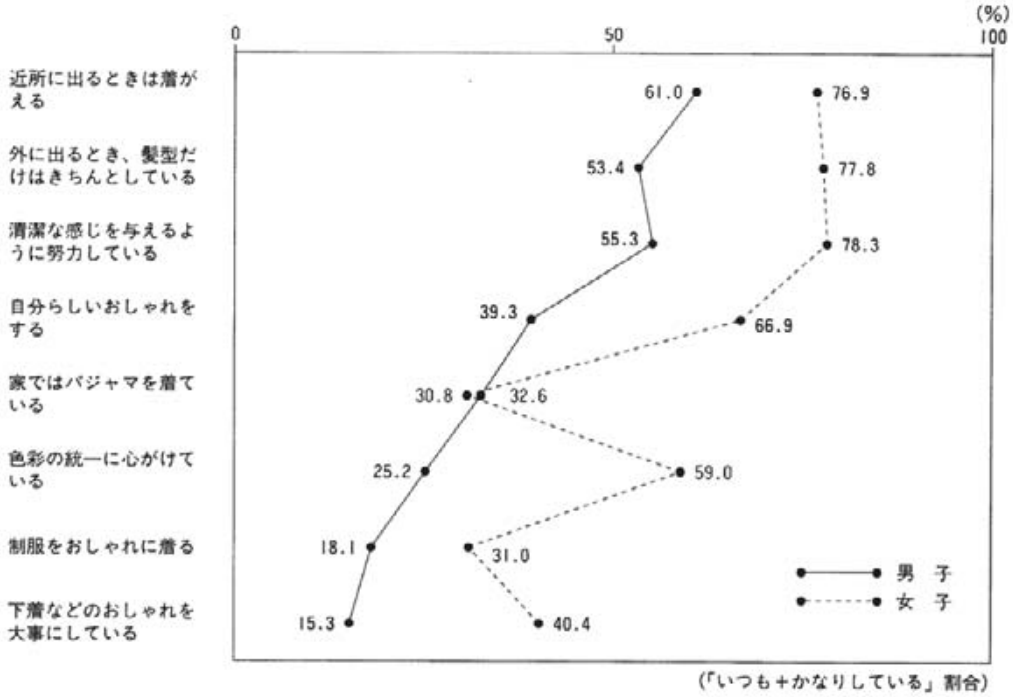
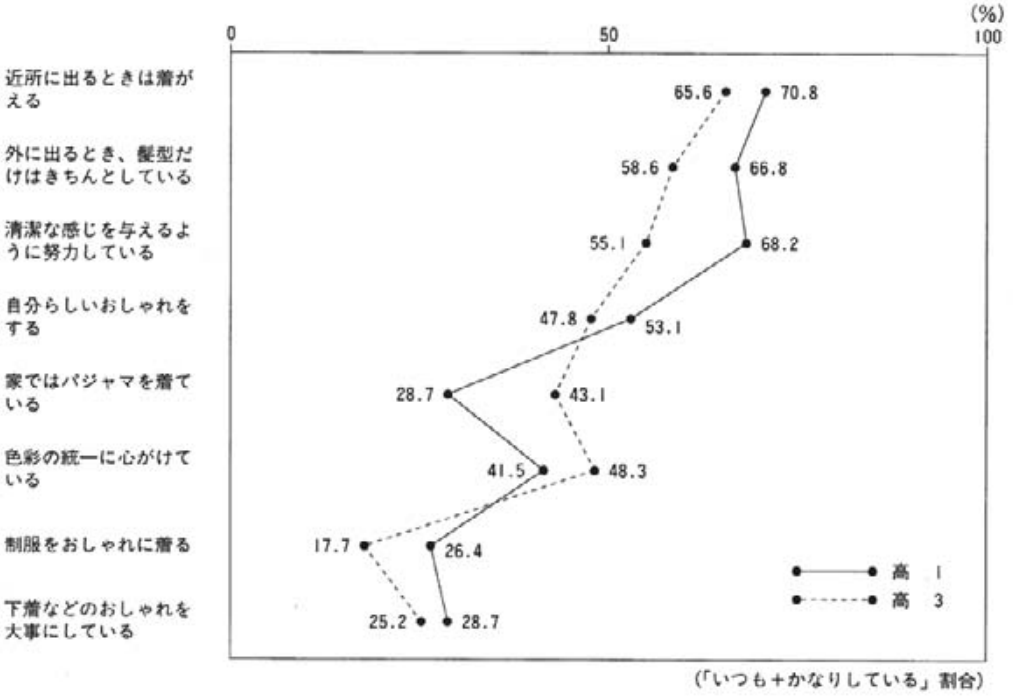

(%)
0
50
100
近所に出るときは着かえる
33.8
34.9
26.1
5.2
外に出るとき、髪型だけはきちんとしている
29.4
35.9
28.9
5.8
清潔な感じを与えるように努力している
20.3
46.2
28.6
4.9
自分らしいおしゃれをする
14.2
38.6
38.6
8.6
家ではパジャマを着ている
11.5
20.2
38.6
29.7
色彩の統一に心がけている
10.9
30.7
44.4
14.0
制服をおしゃれに着る
18.9
55.7
20.0
5.4
下着などのおしゃれを大事にしている
22.2
55.4
17.1
5.3
いつもしている
かなりしている
あまりしていない
まったくしていない

図7　あてはまるもの × 性



(「いつも＋かなりしている」割合)

図8　あてはまるもの × 学年



(「いつも＋かなりしている」割合)

「おしゃれ」についてのメモ（1）

要約で付記したように、本レポートはいつもの同人と異なる人たちの感覚を生かして調査票を作ろうとした。2年近く、月1回の研究会を重ねて調査票を作った。そこで、調査票作りに加わってくれた人たちのおしゃれについてのメモを書いてもらうことにした。

（深谷昌志）

高校生だった頃

西岡知子（東京学芸大学生）

高校生の時、一番みんなが気にしていたおしゃれは髪型でした。髪型がきまらないとなんとなく憂鬱で学校に行きたくないとさえ思ってしまいます。朝寝坊をして時間がないとき、大抵の女の子は朝食をとることよりも髪をセットすることを選びます。ブローをしたり、リボンを結んだり、20分以上時間をかけてセットします。そして、学校では休み時間ごとにトイレでブラッシング、また、髪につけるリボンや髪どめをいくつも揃え、その日の靴下や気分に合わせてつけ替えている人も多かったと思います。

髪に関して驚いたことは、男子が女子に負けず劣らず気をつかっていたことでした。中学校時代に坊主頭の男の子しか見たことがなかったので、自分の部屋の専用の鏡の前にムースやジェルがずらりと並べられているのを見たとき、「あー負けた」と思いました。

また、高校生のおしゃれといえば、制服をどれだけ上手に着こなせるかということも重要なことです。私の学校の制服は、男子は学生服、女子は紺のブレザーに灰色のネクタイといった地味なものでした。さいわい、校則が厳しくなかったので、ちょっとしたおしゃれを楽しむことができました。例えば、ブレザーの丈は短いほうが、ネクタイも細いほうがかっこいいと、その頃は思っていたので、普段家庭科の授業をきちんと聞いていない女の子も一生懸命にミシンにむかっていました。

その他にも、ブラウスに凝ったり、同

じ制服の限られた範囲で、少しでも他の人と違った格好をしようと工夫していました。その少しの違いが自分らしさだと思っていたような気がします。

最後に、ダイエットですが、春になると、女の子は半袖シャツや水着を着る夏に向けてダイエットを始めます。絶対にやせるぞーという意気込みはありますが、それほど悲痛なものではありません。雑誌で情報を得たり、友だちとワイワイ楽しみながらやっていました。お昼になると、幼稚園児のためのような小さな可愛らしいお弁当箱が机の上に並びます。なかにはトコロテンだけがお弁当という人もいました。私の友人におかずを調理するのに一切油を使わず、8キロのダイエットに成功した人や、お昼を一切食べず、朝夕はご飯に味噌汁にタクアンだけの食事で1週間で10キロもやせた人もいました。けれども、こういった激しいダイエットはずっと続くのではなく、何週間かした後、我慢していたパフェを食べはじめ振り出しに戻ってしまいます。そして、またダイエットに挑戦するといった繰り返しです。

高校生の中には、お小遣いの全てを洋服につぎ込み、ピアスの穴を自分で安全ピンであけ、おしゃれがすべてという人もいますし、まったくおしゃれに無頓着な人もいます。しかし、かなりの人たちにとっておしゃれはわざわざするものではなく、身だしなみの一部となっていたのではないでしょうか。

おしゃれな先生へのあこがれ

安田佳代（東京学芸大学生）

高校の時、素敵な女の先生がいらっしゃった。40歳代のバイタリティーあふれる、地学の先生で、研究のためにときどき海外に行っていらっしゃった。また、学生時代には重いリュックを背負ってテントを張りながら、果敢に山を登ったり、国内外の貧乏旅行をしたり、土地測量の棒持ちのバイトを、真っ黒に日焼けしながらやったりもしたようで、そういう経験を熱っぽく話してくださった。当時、高校生の私には、見るもの（旅行中に採集した岩石、風景のスライドなど）・聞くもの全てが未知の世界のことで、とても興味をもち、そういう経験をたくさんなさった先生がとても輝いて見え、「私もこの先生のようにいろいろやってみたい」と、あこがれたものだった。

私がこの先生にあこがれた理由には、もう一つあった。それは、先生がとてもおしゃれだということである。可愛らしい服から渋めの服まで、いろいろとたくさん持っていらっしゃって、同じ服を二度見たことはない気がした。着まわしがとても上手だったためでもあるだろうが、その先生のファッションには関心があり、「今日はどんな服だろう」と楽しみで、「ちょっと地味すぎるんじゃない？」とか「今日の先生ステキだね」などと、授業中に友だちと話した覚えがある。

学校には制服があるし、休日も部活動があるために、おしゃれをして出かける機会はあまりなかった。ふだん自分がしたおしゃれといえば、くつ下の色と髪飾りやヘアバンドの色を揃えたり、ちょっ

とかわった型の襟や、かわいい飾りボタンのついたブラウスを着る程度のことだった。カワイイものだったと思う。ブレザーにボックススカートの制服では、この程度のおしゃれしかできないし、しないのだから、「自分はどんな人間か」とたずねられても、「おしゃれである」とか「ファッションに敏感である」などとは言い切りにくいのである。

「卒業したらやってみたいこと」と「おしゃれの自己評価」のクロスデータで、自分はおしゃれだと思っている高校生のほうがそうでない高校生よりも、いろいろなことに興味をもっていて、積極性があるという結果がでていた。今思うと、多くのことに挑戦していて視野が広く、また、おしゃれもしていて、私たち生徒のあこがれだったあの先生は、まさにこの結果を象徴している。

周りから「おしゃれなんて必要ない」と言われても、本人にとっては全然ピンとこない。おしゃれをしたいと思っている高校生には必要とか必要でないとかという問題でなく、ごく自然な行為だと思う。だれかに迷惑をかけるのなら問題だが、そうではないのならば、高校生のおしゃれはとやかく言われるすじあいのことではなく、もっとあたたかく見守られてもいい気がする。

おしゃれの思い出

山元ゆかり（東京学芸大学生）

私はファッション雑誌を見るということはあまりない。と言っても、私のおしゃれが、他からの影響を全く受けていない、自己流であるというわけでもない。私に「あの服がいいな」「すてきな髪型だな」と思わせてくれるのは、大抵、私の身近な人のおしゃれであり、初めてそのように感じたのは高校生の時であった。

高校時代、ブラスバンド部でクラリネットをやっており、私の高校生活は部活に始まり部活に終わったといってもよいくらいである。その部活の中に私があこがれていた人がおり、その人は２つ年上で同じクラリネットパートの先輩であった。その先輩のクラリネットから出てくる音色はとてもやわらかい、澄んだ音色であった。文化祭では、その先輩がスポットライトを浴びながらソロを演奏し、先輩と同じ舞台に立っているということが、私の自慢になってしまうほどであった。

私の高校には制服があったために、先輩の私服姿を初めて見たのは、夏休みに河口湖へ合宿に行ったときであった。そのときに見た先輩の私服姿は、サマーセーターにプリーツのロングスカート、髪にリボンというように特に変わっているわけではないが、今でも覚えているほどすてきで、先輩が輝いているように見えた。そして、その合宿が終わってから、ショッピングに出かけると、つい合宿で見た先輩が着ていたものと同じような服を探してしまっている自分に気がついた。背の高い容姿端麗な先輩が着ていたものが、自分にも似合うとは限らないとわかっていても、やはり似たような服を着たいと思ってしまうのである。

このように、私の初めてのおしゃれの

モデルはファッション雑誌のモデルではなく、高校時代の先輩と身近な人であったが、それは今でも変わりはない。ただ、私のモデルになる人は身近な人であればだれでもよいわけではなく、ある共通性がある。それは、高校時代の先輩のように、その人自身も私のあこがれであるということである。いくら美人でスタイルがよくても、その人が私をあこがれさせてくれるような人でなければ、私のおしゃれのモデルとなることはない。今でも、ショッピングに出かけると、友人や知り合いが着ていたものと同じような服を探してしまっているが、そのときに浮かんでくるのは、何かすばらしい才能をもっている人、自分の生き方に目標をしっかりもっている人、何事に対しても一生懸命にやっている人、自分のことよりも他人のことを考えている人、というように私から見ると輝いている人ばかりである。

このように、私におしゃれだと感じさせてくれる人は、輝いている人ばかりであるが、逆に考えてみると、それはその人自身が輝いていると、その人のおしゃれも輝いて見えるためではないかと私は思う。"おしゃれは内面からするものである"という言葉があるが、それはこのように内面の輝きが表面に現れ、「おしゃれ」となることをいっているのではないだろうか。

第Ⅱ章 髪や服装へのこだわり

1．朝シャンをしているか

高校生のおしゃれというと、何よりもイメージにうかぶのはヘアスタイルであろう。サラサラとした髪を長くたらしている女子高校生、あるいはこざっぱりといかにも若々しいヘアスタイルの男子生徒をみると、彼らが髪に強いこだわりをもっているのを感じる。

図9から明らかなように、「やや」も含めると80％の生徒は「髪の乱れが気になる」、そして60％の生徒は「トイレに行ったときは髪をとかす」と答えている。

おしゃれではないかもしれないが、身だしなみに心がけているつもりというのが高校生の反応のようだが、「毎日シャンプーしないと気持ちが悪い」という生徒は「かなり」の29％を含めて73％に達する（**図10**）。

そして、こうした髪についての心遣いでは高1よりも高3の生徒のほうが気をつけている割合が高い(**図11**)。また、男女別に注目してみると、当然のことながら、女子のほうが髪に気をつかっている。「毎日シャンプーしないと気持ちが悪い」女子は79％、「髪型がきまらないと外出したくない」女子も64％を占める。それに対し、男子たちは「毎日シャンプーしないと気持ちが悪い」者が68％に達する以外は、髪にこれといった気をつかっていない（**図12**）。

なお、髪に対する心遣いはおしゃれに関係しているのであろうか。**図13**は、高校生のおしゃれを「まったくちがう（まったくおしゃ

れでない)」、「あまりそうでない(あまりおしゃれでない)」、「やや～とてもおしゃれ」に3分し、それと髪に対する意識をクロスさせた結果を示している。

図中のプロフィールが示すように、おしゃれだと思っている生徒は、全体として髪に気をつかっている。中でも「髪型がきまらないと外出したくない」や「朝食をぬいでも髪をきちんとする」と答える割合は、おしゃれのグループに多い。

したがって、おしゃれな生徒ほどヘアスタイルに気を配っているのがわかる。少なくとも、ヘアスタイルに自信があることがおしゃれの1つの条件のように思われる。

図9　髪についての気持ち

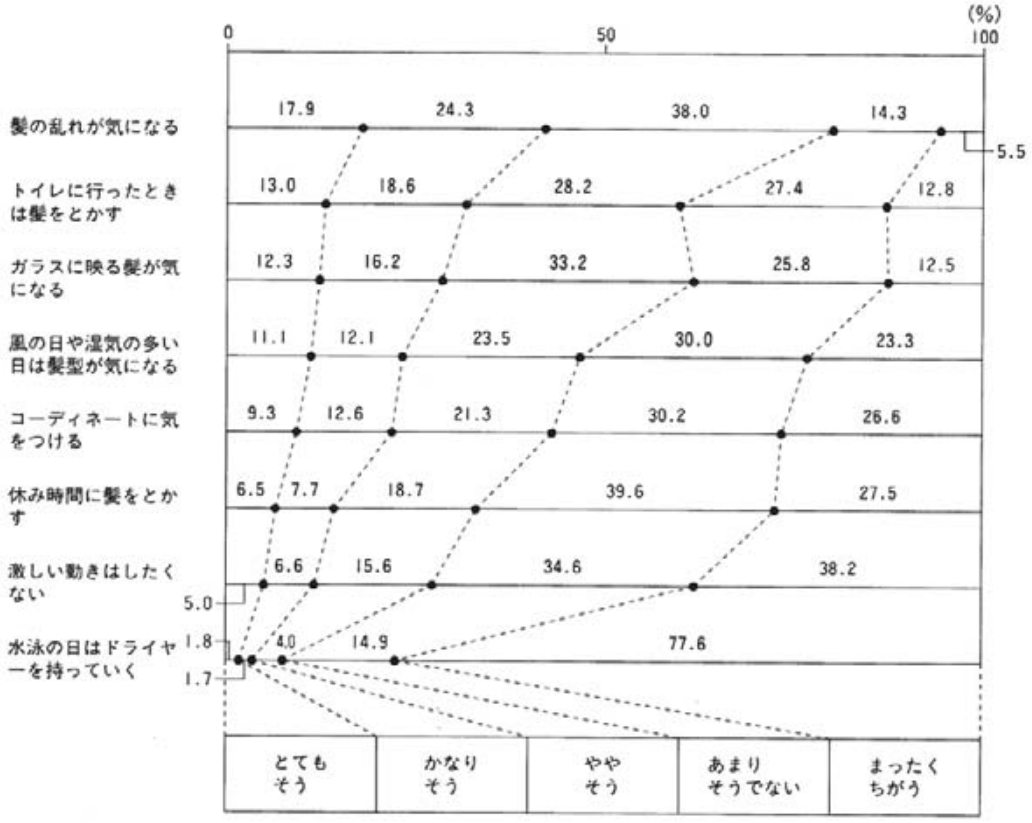


図10　髪に対する意識

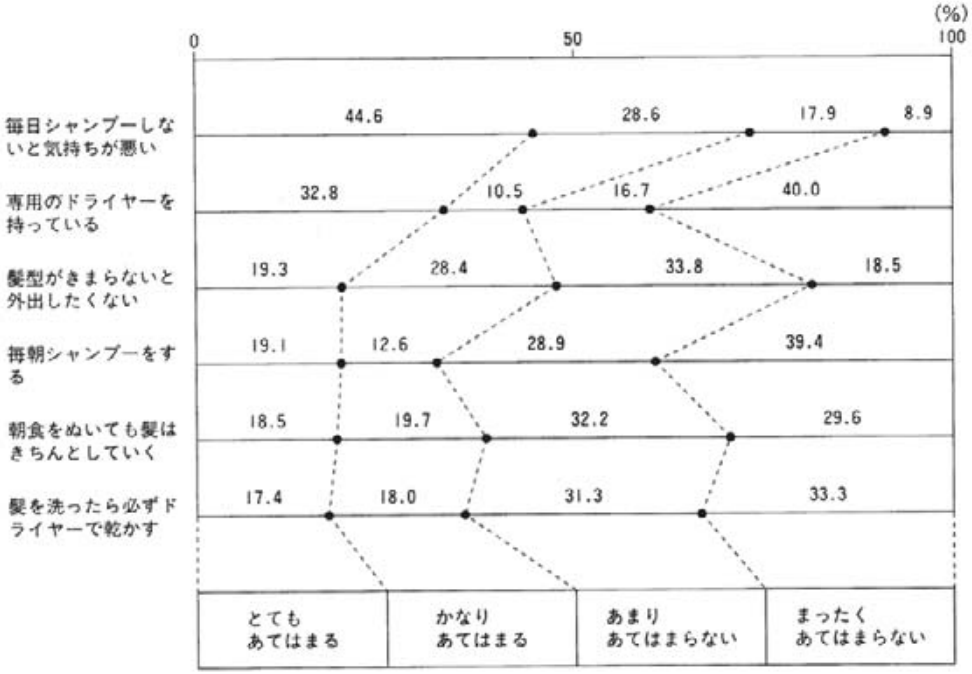


図11　髪に対する意識 × 学年

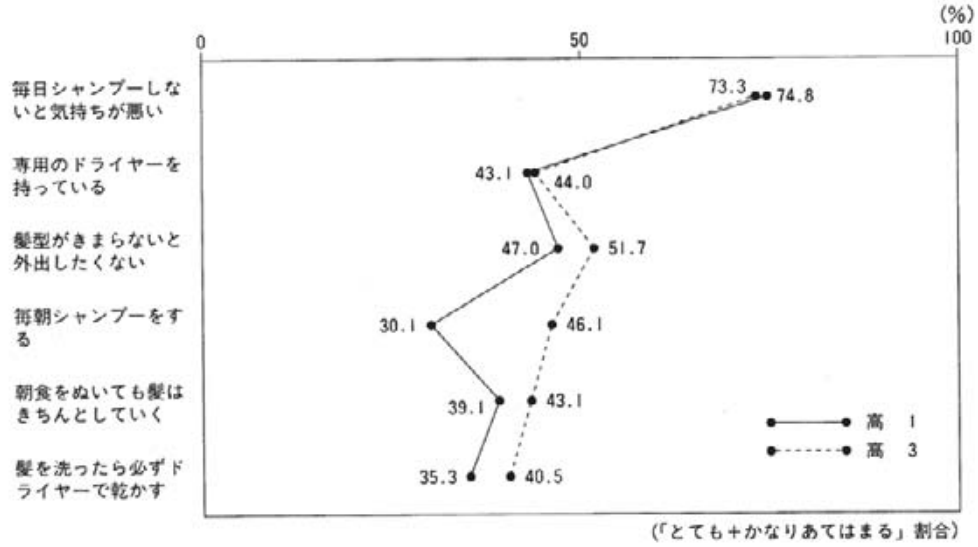


図12　髪に対する意識 × 性

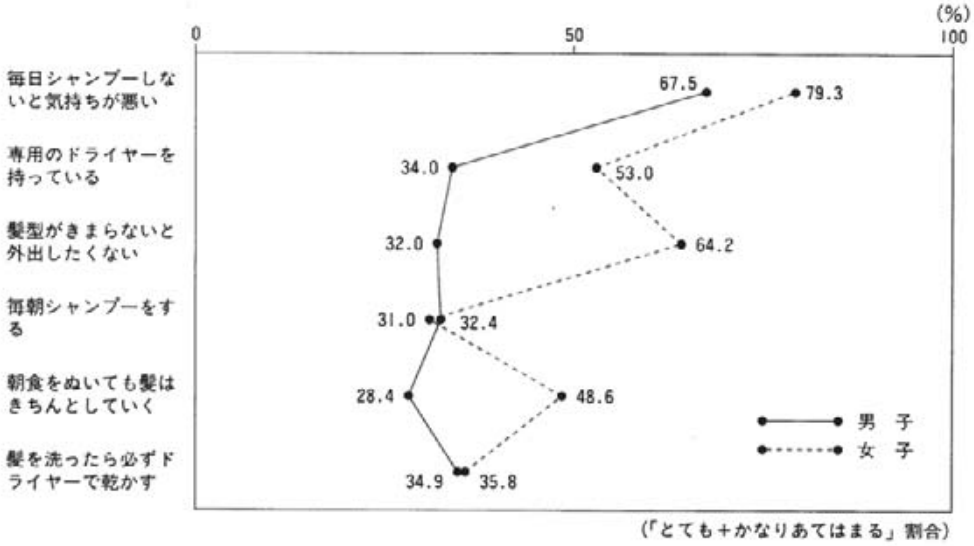
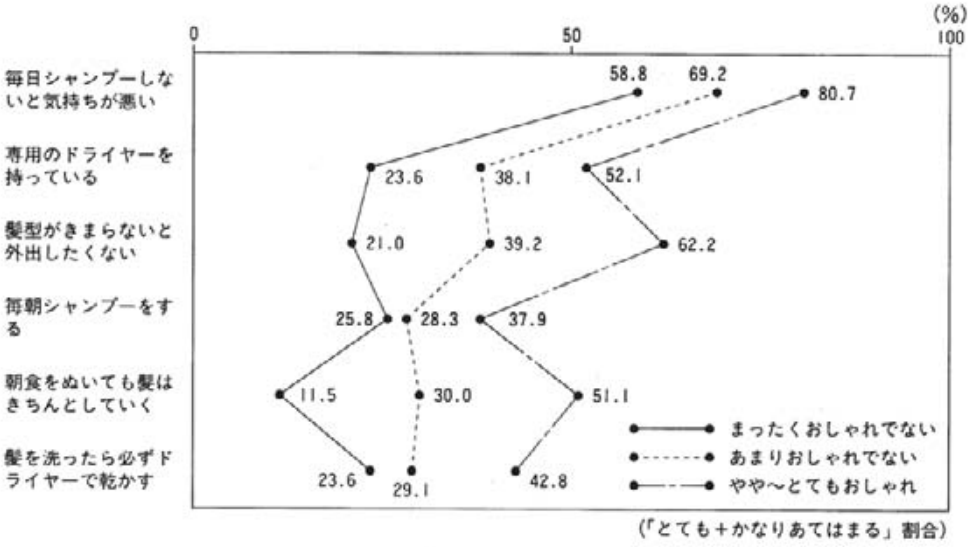


図13　髪に対する意識 × おしゃれの自己評価



2．髪に満足しているか

高校生たちの朝シャンが問題になったことがあった。近頃では、毎朝シャンプーすると油分がぬけて、かえって髪を傷めるという説も出てきて、以前よりは朝シャンをする生徒が減ってきたといわれる。

そして、**図14**によれば、テストの前日でも髪を洗う生徒は「なんとしても」の41%に「きっと」の33%を含めて74%と、ほぼ4分の3に達する。また、テスト期間中でも洗髪する生徒は「なんとしても」の36%に「きっと」の30%を含めて66%を占める。したがって、高校生たちはなんとか言いながらも、ヘアスタイルに気をつけているように思う。

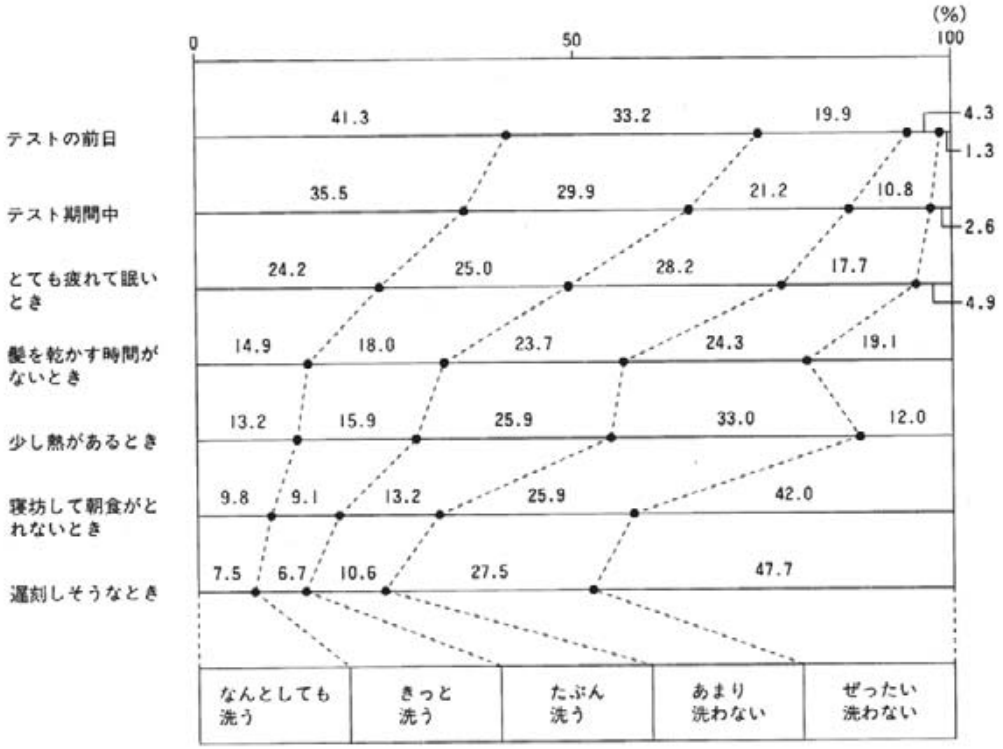
なお、シャンプーをするときを性別に着目してみると、**図15**から明らかなように、性別にはほとんど関係していない。ということは女子だけでなく、男子もこまめにシャンプーしているのであろう。

それでは、生徒たちは全体として、自分の髪に満足しているのだろうか。髪の色や髪の長さ、髪のつやのいずれについても、「やや満足」か「あまり満足していない」程度にとどまっている（**図16**）。

そして、髪に対する満足感を性別に集計してみると、男子よりも女子のほうが、満足している割合が高い（**図17**）。

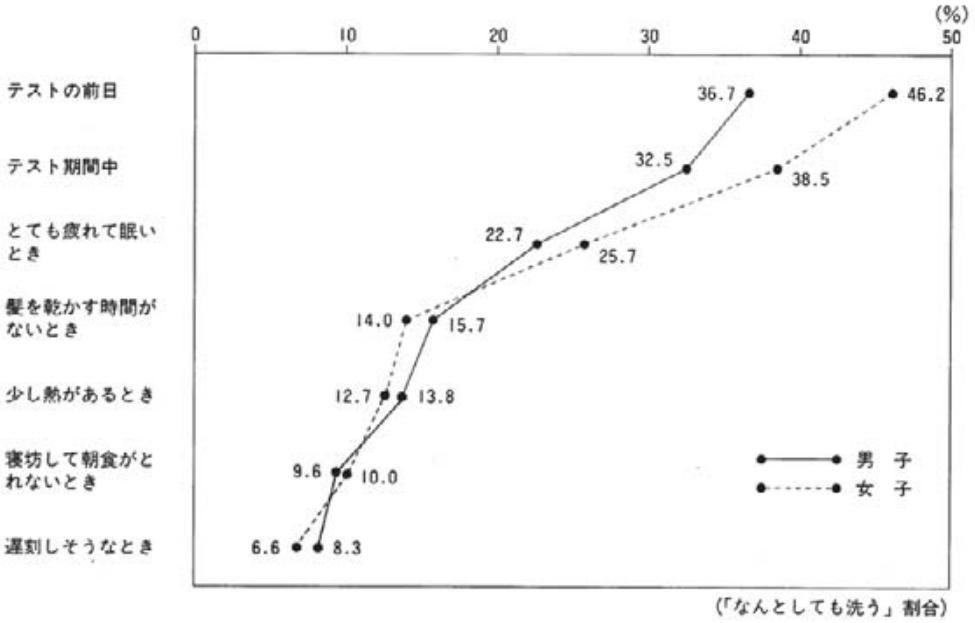
なお、自分の髪に対する満足感とおしゃれとの関係を調べてみると、**表6**の通りに、お

図14　こんなときシャンプーはするか



しゃれだと思っている生徒ほど、髪に満足している割合が高い。おしゃれだと自覚している生徒の33%が髪に満足しているのに対し、おしゃれでない生徒で髪に満足している者は18%にとどまっている。換言するなら、おしゃれな生徒は髪についても気をつけ、自分なりに満足のできるヘアスタイルをしているのであろうか。

図15　こんなときシャンプーはするか × 性



(「なんとしても洗う」割合)

図16　自分の髪に満足か

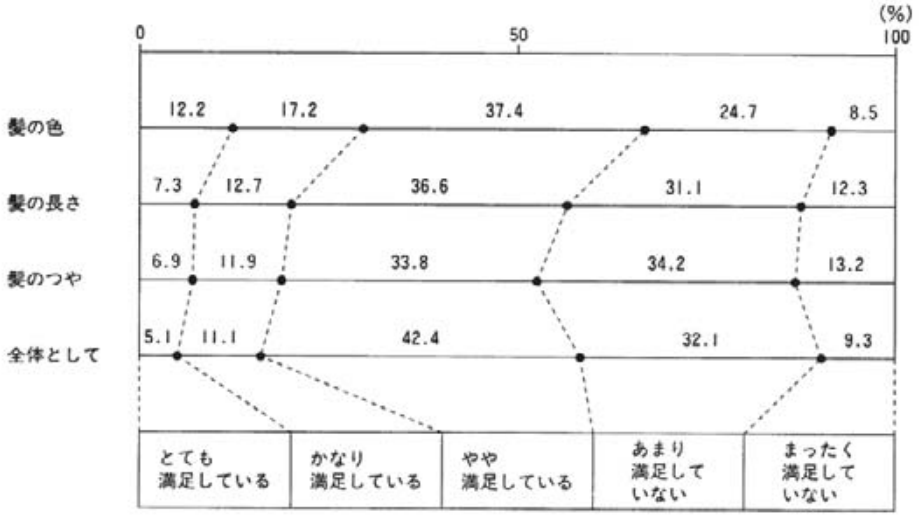
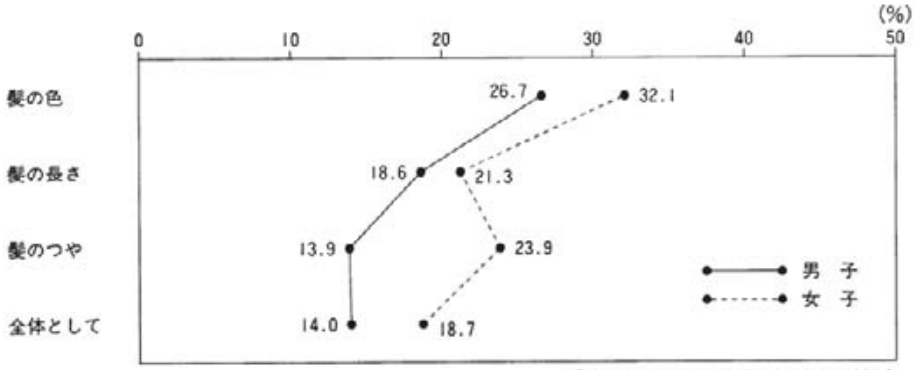


図17　自分の髪に満足か × 性



(「とても＋かなり満足している」割合)

表6　自分の髪に満足か × おしゃれの自己評価

(%)

		満足している			満足していない	
		とても	かなり	やや	あまり	まったく
おしゃれ	とても＋かなり	14.4	18.6	36.6	21.4	9.0
		33.0			30.4	
	やや	4.2	16.4	46.0	27.8	5.6
		20.6			33.4	
おしゃれでない	あまり	3.7	6.7	41.7	38.8	9.1
		10.4			47.9	
	まったく	8.9	8.9	34.4	26.1	21.7
		17.8			47.8	

3．着るもののおしゃれ

おしゃれというときに、まず気になるのはヘアスタイルであろうが、その他にも着るものについても、生徒たちは関心をもつのが当然であろう。

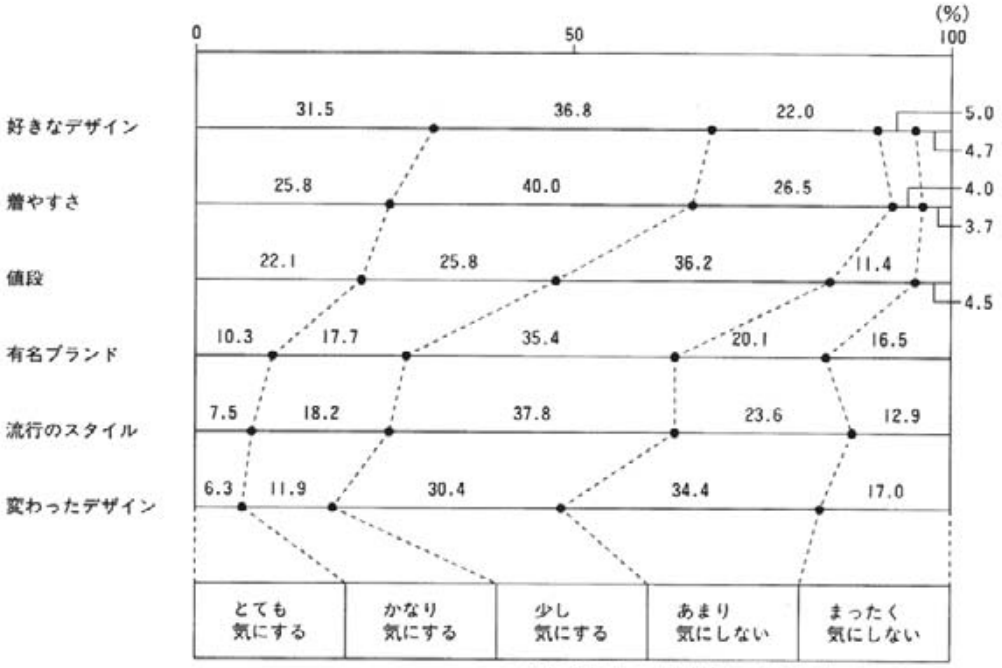
もちろん、高校生の小遣いではそんなに高価なものを求めることはないと思われるが、次にいくつかの項目で服装について質問してみた。まず、ジーンズについては**図18**の結果が示すように、高校生たちは「好きなデザイン」(「とても」に「かなり」を含めて68%)で、「着やすいもの」(66%)を求めている。そして、ジーンズについてのおしゃれは男子よりも女子のほうが気にかけている割合が多いのは、**表7**の示す通りである。

さらに、Tシャツを選ぶときは好きな色で素材のよいものを選んでいるという(**図19**)。そして、属性別の分析結果でも、ジーンズの場合と同じように、男子よりも女子のほうが、また学年別では、高2の生徒がTシャツを買うときにいろいろとこだわっているような印象を受ける(**表8**)。

図20は、Tシャツを選ぶときに色や型を気にするかとおしゃれの自覚とをクロスさせた結果を示している。ここでも、おしゃれだと思っている生徒はTシャツの色や型に、そうでない生徒よりも気にしている割合が多い。

こう見てくると、おしゃれな生徒はヘアスタイルにちょっと気をつけ、ジーンズやTシャツに他の人よりちょっとおしゃれなものを求める。そうしたこまかな差がおしゃれかど

図18　ジーンズを選ぶとき



＊図の読みやすさを考慮し、尺度を逆にしてある。

うかの違いを生み出しているように思われる。

なお、髪型や服装にどうして気をつかうかについて、生徒たちは図21のように、「ダサイと思われたくない」し、「自分らしさを表現」し、「自分をよりよく見せたい」からだという。自分らしさを表現する手段が髪型や服装だという考え方に、いかにも若者らしさを感じる。

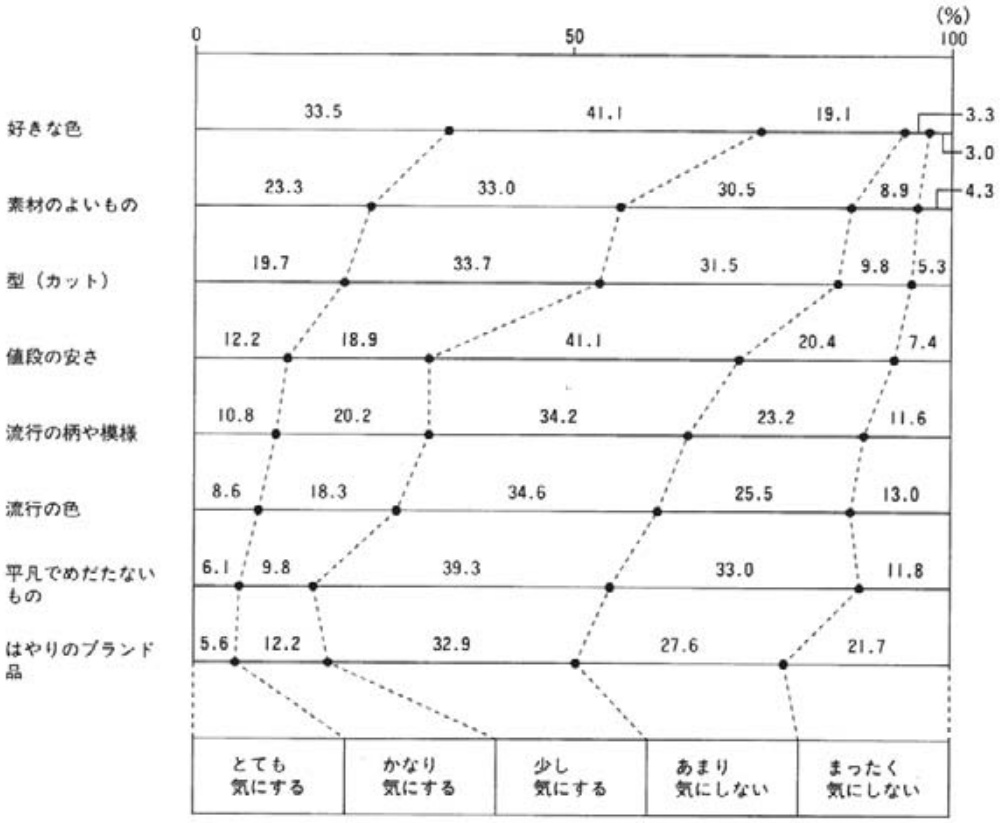
表7　ジーンズを選ぶとき × 属性

(%)

	性			学年				
	男子		女子	高1		高2		高3
好きなデザイン	57.7	<	(79.4)	69.0	<	(71.8)	>	54.4
着やすさ	61.0	<	(70.9)	64.2	<	(73.8)	>	63.5
値段	44.1	<	(52.1)	47.1	<	(51.8)	>	48.2
有名ブランド	(30.7)	>	25.0	25.0	<	(41.8)	>	25.8
流行のスタイル	23.6	<	(28.1)	(27.1)	>	22.7	>	19.1
変わったデザイン	16.3	<	(20.1)	(19.0)	>	16.1	>	14.8

(「とても＋かなり気にする」割合)

図19　Tシャツを選ぶとき



＊図の読みやすさを考慮し、尺度を逆にしてある。

表8　Tシャツを選ぶとき × 属性

(%)

	性			学年				
	男子		女子	高1		高2		高3
好きな色	64.3	<	(85.3)	74.7	<	(77.8)	>	65.5
素材のよいもの	47.3	<	(65.9)	55.8	<	(62.3)	>	49.1
型（カット）	42.5	<	(65.0)	(55.3)	>	50.2	>	41.2
値段の安さ	31.2	=	31.1	29.3	<	(36.8)	>	35.9
流行の柄や模様	27.2	<	(35.1)	(34.0)	>	24.9	>	16.3
流行の色	23.1	<	(31.0)	(28.7)	>	24.5	>	15.5
平凡でめだたないもの	(18.1)	>	13.5	14.4	<	(22.6)	>	14.7
はやりのブランド品	16.2	<	(19.4)	17.5	<	(20.5)	>	14.6

（「とても＋かなり気にする」割合）

図20　Tシャツを選ぶとき × おしゃれに自信

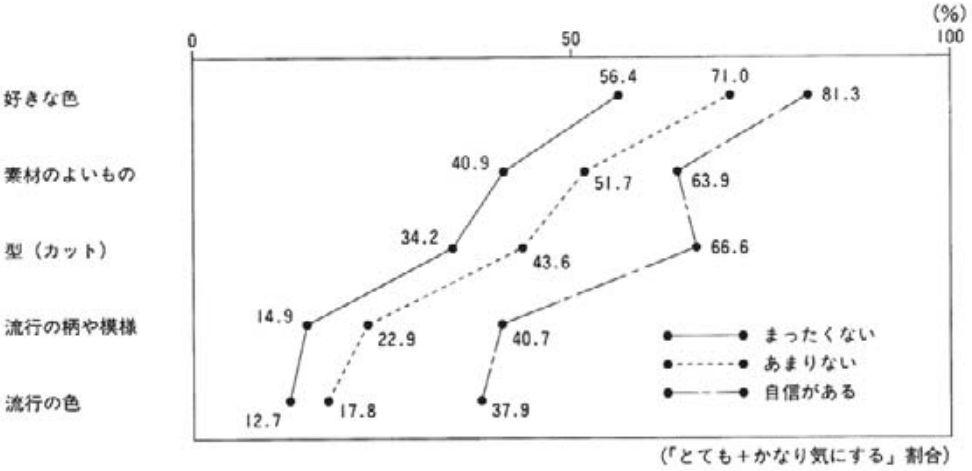
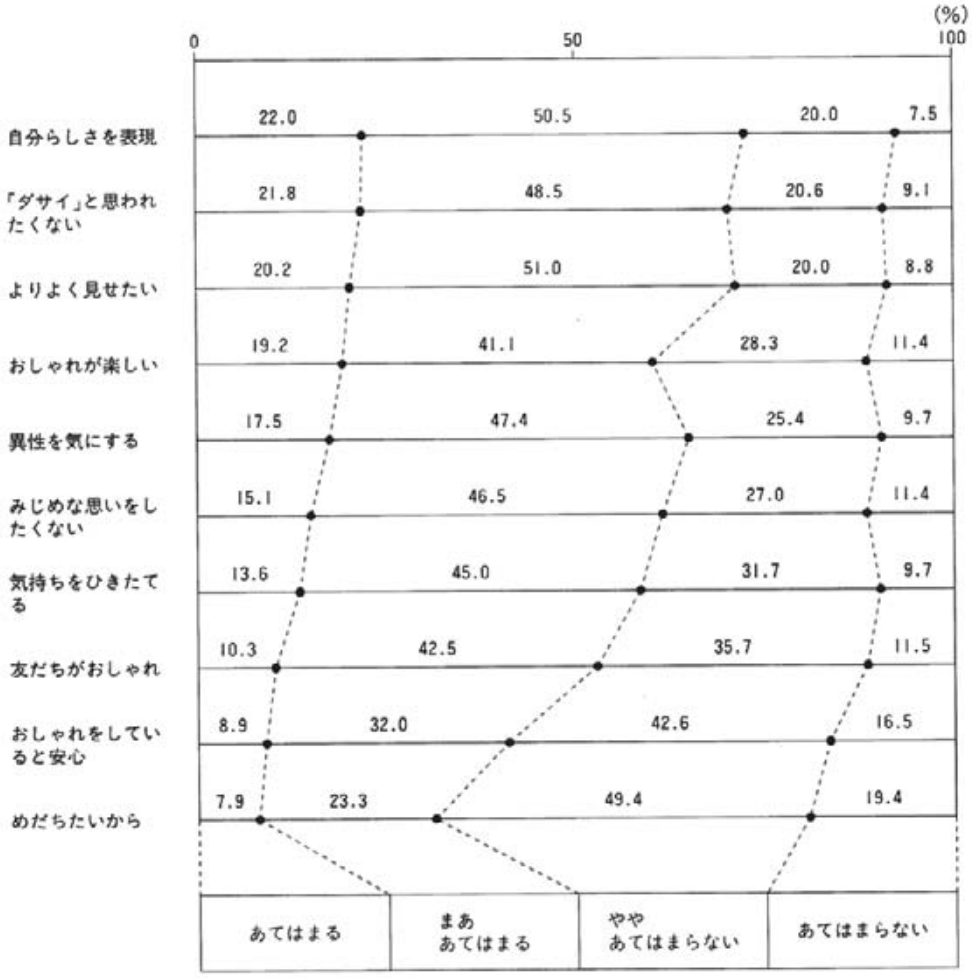


図21　髪型や服装を気にするのはなぜか



第Ⅲ章 自分の体型について

1．やせているほうか

高校生たちのおしゃれといったときに、ヘアスタイル以上に、生徒たちが気にしているのは、ダイエットであろう。

他の人の目からすると十分にやせているのに、本人はまだ太っていると思い込んでいる。そうしたことから拒食症とまでいかなくとも、極端な形で食事をとろうとしない生徒が少なくない。

そこで、以下、体型についてのデータをいくつか紹介してみよう。生徒たちの身長は**図22**のように、男子は166～170cm、女子は156～160cmに中央値が位置している。そして体重についても、男子の中央値は56～60kg、女子は46～50kgである（**図23**）。

高校生は成長の過程であり、多少太っていても、むしろ健康なのではないかと思うが、自分の体型についての自己評価を求めると、**図24**のような結果が得られる。

設問では「かなりやせている」から「かなり太っている」までの7段階を設定したが、これを大きく類型化すると、以下の通りとなる。

	男子	女子
「かなりやせている」～「やせぎみ」	40%	10%
「ふつう」	39%	38%
「太りぎみ」～「かなり太っている」	21%	52%

つまり、半数を超える女子生徒が太っていると自覚している。中でも、「かなり太っている」と思っている者が19%に達する。

それだけに、女子にとって太っているかどうかは大事なことなのであろう。なお、自分の体型とおしゃれの自己評価との関係では**図25**のように、やせ型のほうが自分のおしゃれに自信をもつ傾向が得られている。

また、自分の体型に満足しているかについて、男子の54%、女子の83%が自分の体型に不満だと答えている（**図26**）。

そこで、体型に満足しているかどうかを自分の体型に関連させて分析してみると、以下のような結果が得られている。

	不満			
	かなり＋	少し	＝	不満
〔男子〕				
やせている	14.4%	＋38.5%	＝	52.9%
やせぎみ	10.4%	＋39.3%	＝	49.7%
ふつう	8.9%	＋35.8%	＝	44.7%
太りぎみ	13.4%	＋41.5%	＝	54.9%
太っている	19.5%	＋45.6%	＝	65.1%
〔女子〕				
やせている	18.5%	＋43.5%	＝	62.0%
やせぎみ	22.9%	＋48.9%	＝	71.8%
ふつう	30.6%	＋47.3%	＝	77.9%
太りぎみ	46.2%	＋45.5%	＝	91.7%
太っている	51.4%	＋45.1%	＝	96.5%

図22　身長

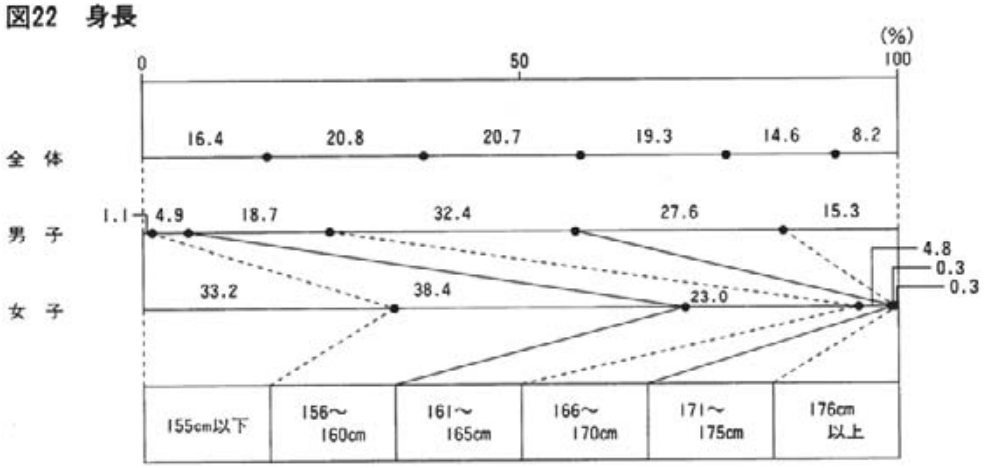
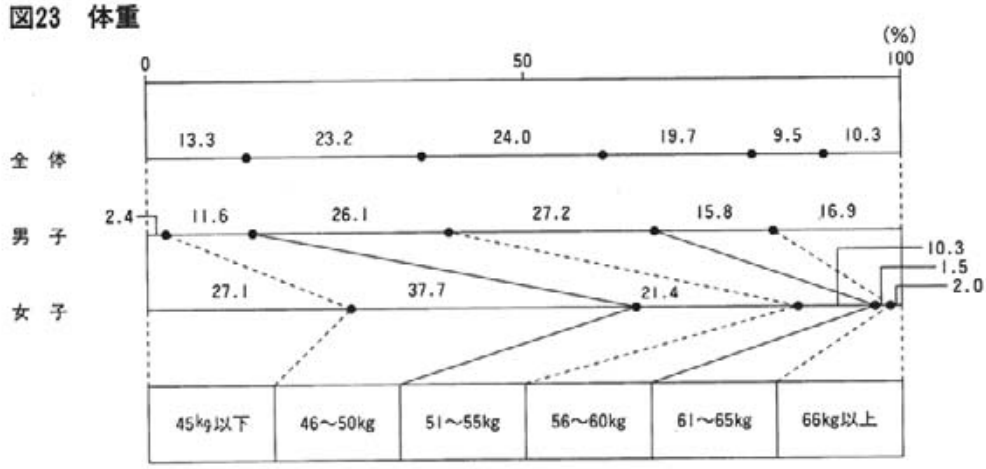


図23　体重



男子の場合、太っているからといって、自分の体型に不満が残るといってもそれほど不満ではない。しかし、女子の場合、太りぎみでも、体型に不満をもらしている。

図24　自分の体型 × 属性

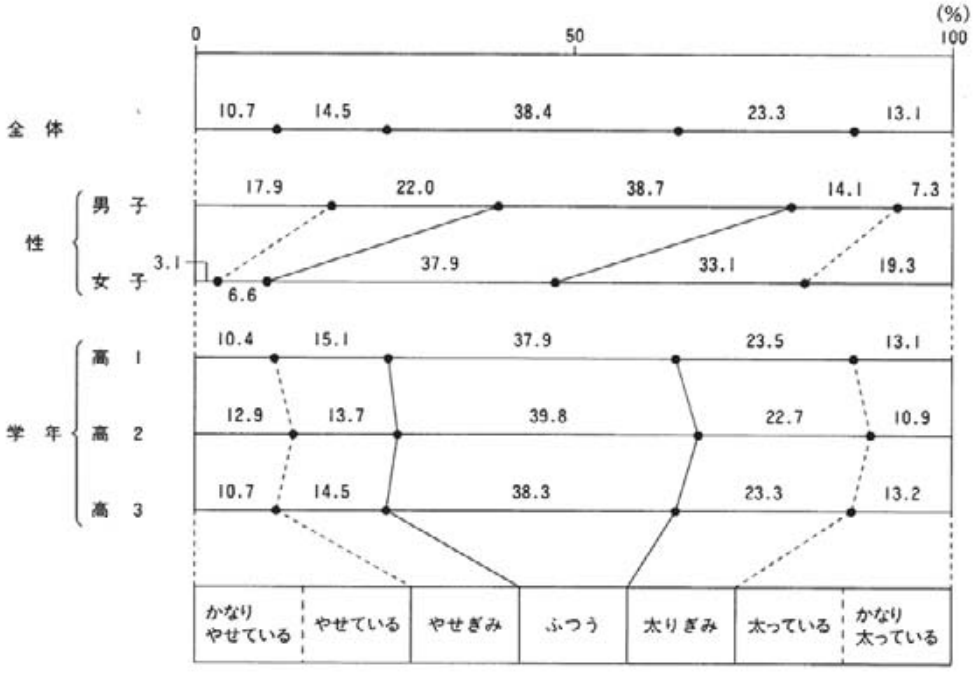


図25　自分の体型 × おしゃれに自信

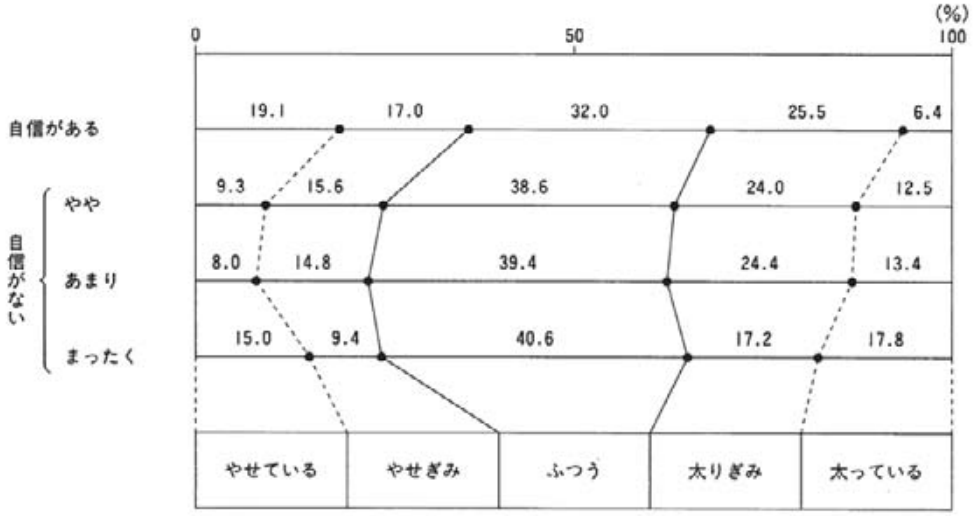
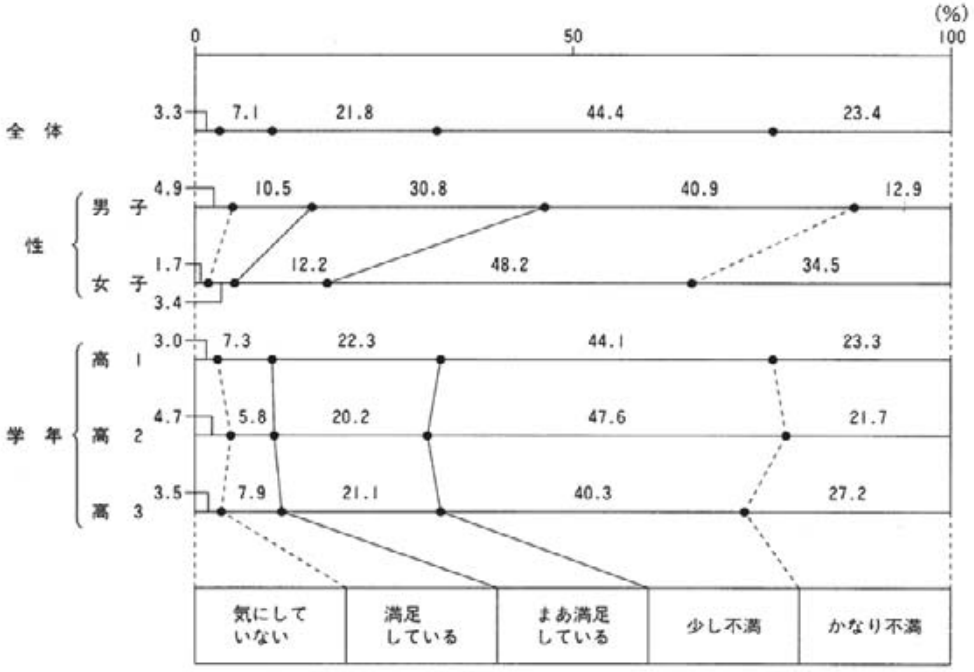


図26　体型に満足か × 属性



2．理想的な体型

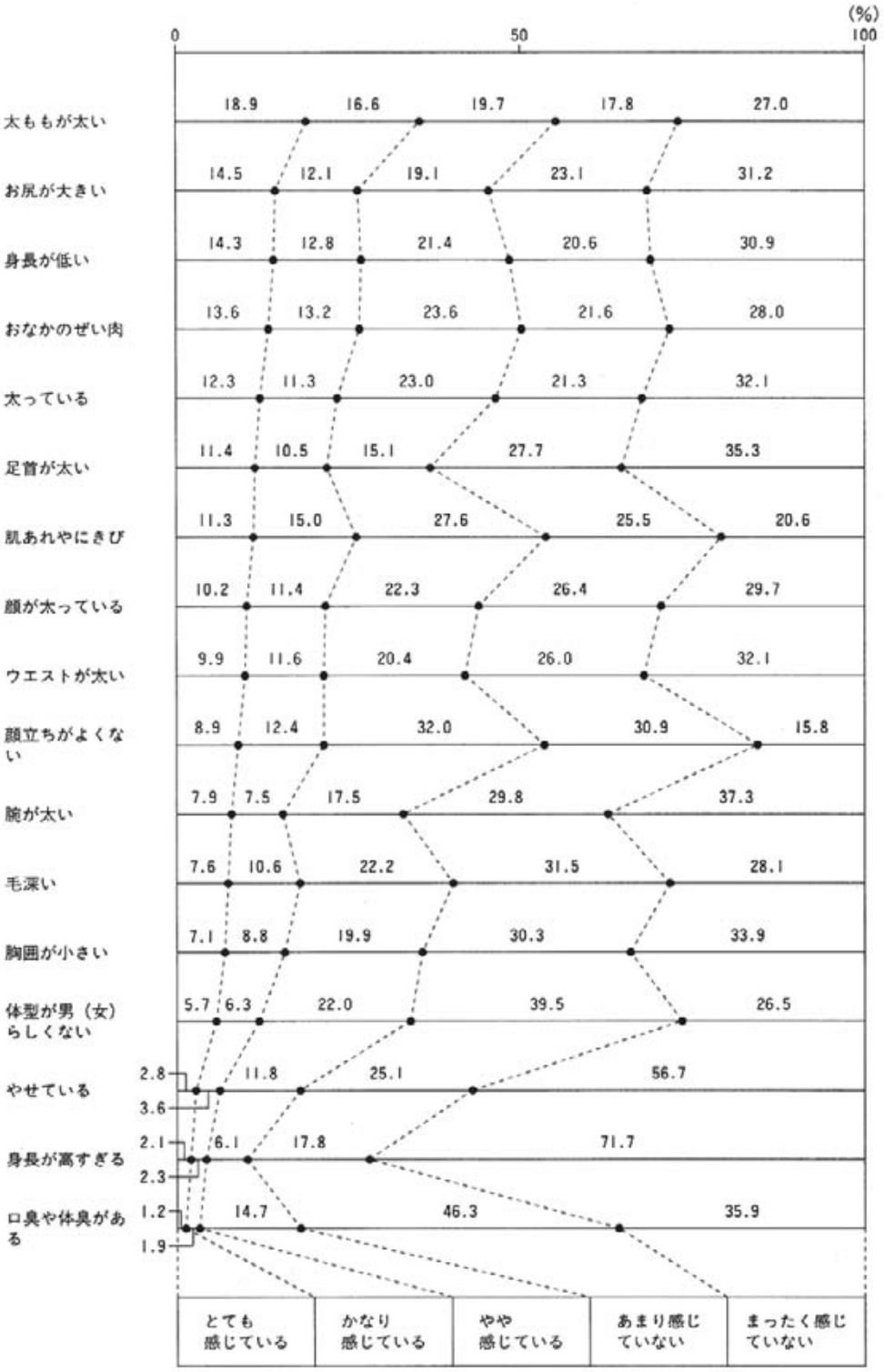
このように生徒たちは、中でも女子生徒は、何よりもやせたいと思っている。そこで、もう少しくわしく生徒たちの好む体型についてたずねると、**図27**のようになる。予想外のように思われるが、「やせたい」を除くと、生徒たちは自分の体型について、それほどはっきりとした不満をもらしていない。図が示すように、「太ももが太い」や「お尻が大きい」などについて、「とても」に「かなり」を加えても、不満を感じているのは3割程度である。

もちろん、体型といっても、男子と女子とでもつ意味が異なると考えられる。そこで、男性の理想的な体型についてたずねると、**図28**の結果が得られる。男性の理想的な体型としては、「身長が高く、そして体臭のないほうがいい」、それに「足が長ければ」なおのことよいという結果である。そして、**図29**によれば、女子のほうが体臭のなさを望み、男子は足の長いほうが好きというような違いが認められるが、全体としての傾向は男女ともに共通している。

また、女性の理想的な体型は「体臭がなく」「やせすぎでなく」「バストの大きい」タイプだという(**図30**)。そして、そうした好みについては、女子のほうがそう思っている割合が多い（**図31**)。

〔男子〕　1．体臭は嫌だ
　　2．身長が高い
　　3．足が長い
　　4．毛深いのは嫌だ

図27　コンプレックスを感じるか



〔女子〕 1．体臭は嫌だ
2．やせすぎでない
3．バストが大きい
4．色白

このように、男女とも体臭のないほうがよいが、その中で、身長の高いのが男子、やせすぎず、バストの大きいのが女子の理想型となる。

図28　理想的体型（男性）

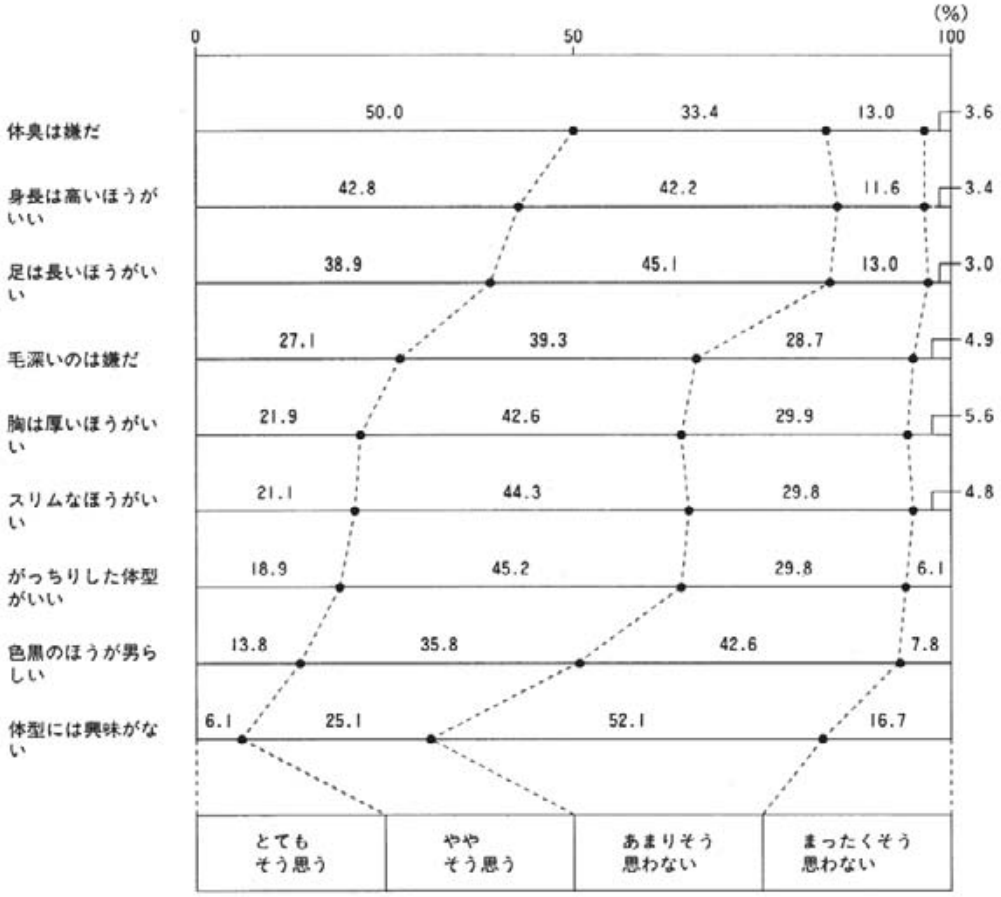


図29　理想的体型（男性）× 性

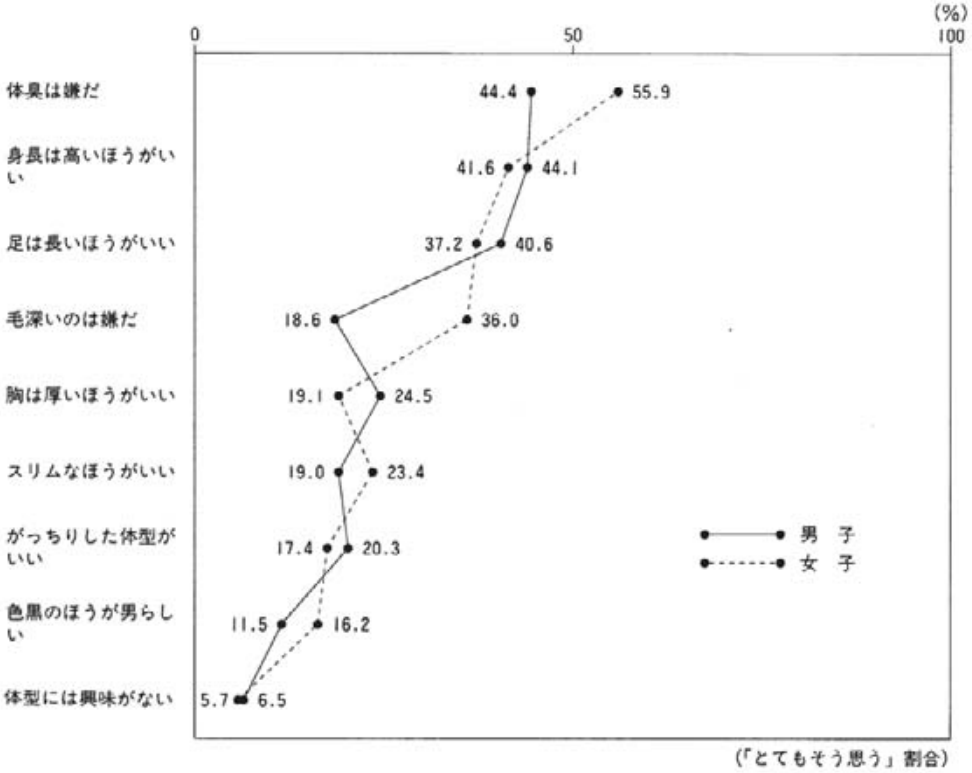


図30　理想的体型（女性）

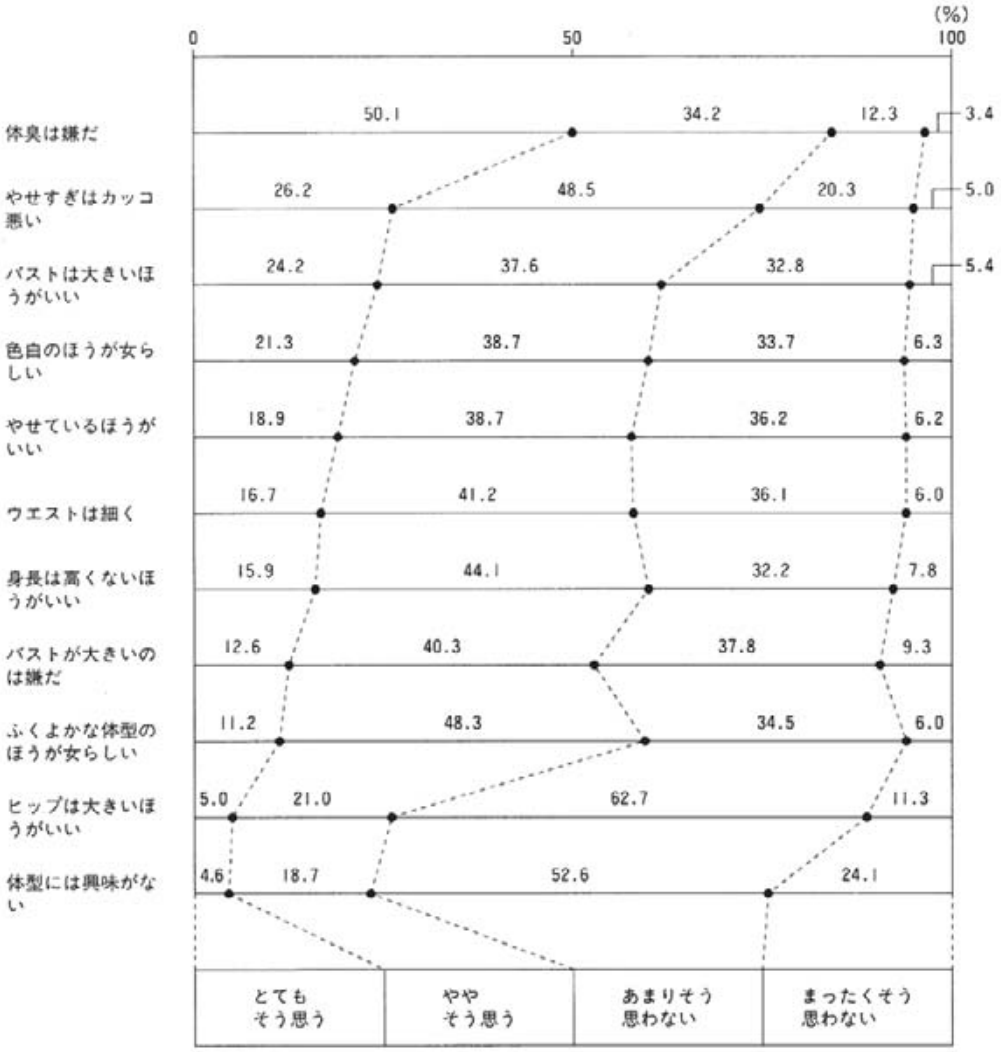
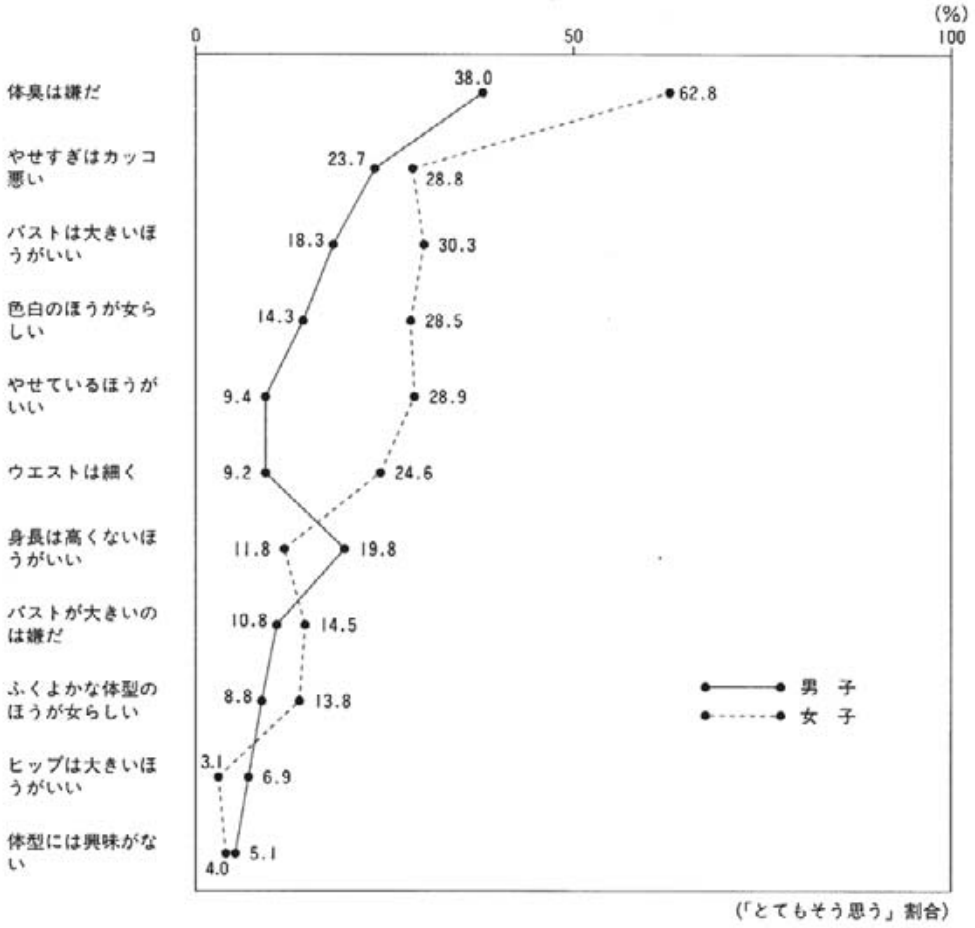

(%)
0
50
100
体臭は嫌だ
50.1
34.2
12.3
3.4
やせすぎはカッコ悪い
26.2
48.5
20.3
5.0
バストは大きいほうがいい
24.2
37.6
32.8
5.4
色白のほうが女らしい
21.3
38.7
33.7
6.3
やせているほうがいい
18.9
38.7
36.2
6.2
ウエストは細く
16.7
41.2
36.1
6.0
身長は高くないほうがいい
15.9
44.1
32.2
7.8
バストが大きいのは嫌だ
12.6
40.3
37.8
9.3
ふくよかな体型のほうが女らしい
11.2
48.3
34.5
6.0
ヒップは大きいほうがいい
5.0
21.0
62.7
11.3
体型には興味がない
4.6
18.7
52.6
24.1
とても そう思う
やや そう思う
あまりそう 思わない
まったくそう 思わない

図31　理想的体型（女性）× 性



（「とてもそう思う」割合）

3．ダイエットへの思い

体臭はともあれ、生徒、特に女子生徒の間で、やせたい願望が強かったのはすでに述べた通りだが、それでは実際に、女子生徒はダイエットしているのだろうか。

「ダイエットに関心がある」と「ダイエットをしている」とを１つにまとめて図化してみると、**図32**となる。男子はダイエットをほとんどしていないし、関心ももっていないという。それに対し、女子の71％がダイエットに関心をもち、23％がダイエットをしていると答えている。

なお、ダイエットとおしゃれへの自覚についてのクロスでは**図33**のように、おしゃれに自信のある生徒はダイエットに関心をもち、ダイエットを行っている割合が多い。それに対し、おしゃれに自信のない生徒がダイエットをあまりしていないのが目につく。

そうした意味では、おしゃれへの自覚は自分の体型に対するこだわりとなってあらわれているように思う。

それでは、生徒たちはどういう形のダイエットをしているのか。**図34**のように、運動を

したり、食事の回数を減らしたりするのが、ダイエットの主流のように見える。

なお、やや蛇足の感があるが、おしゃれな食べ物という問いに、**図35**のように、ケーキやアイスクリーム、クッキーがおしゃれで、かりんとうやまんじゅう、ポテトチップスがおしゃれでないという。

図32　ダイエット

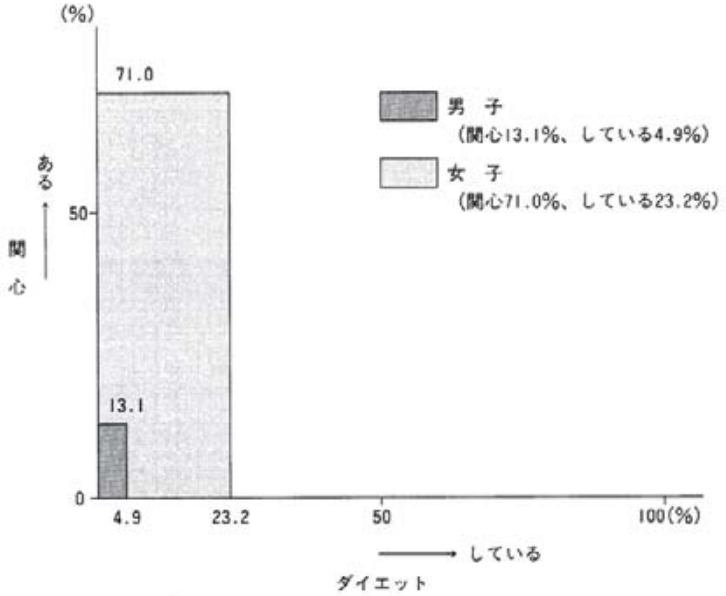


図33　ダイエット × おしゃれに自信

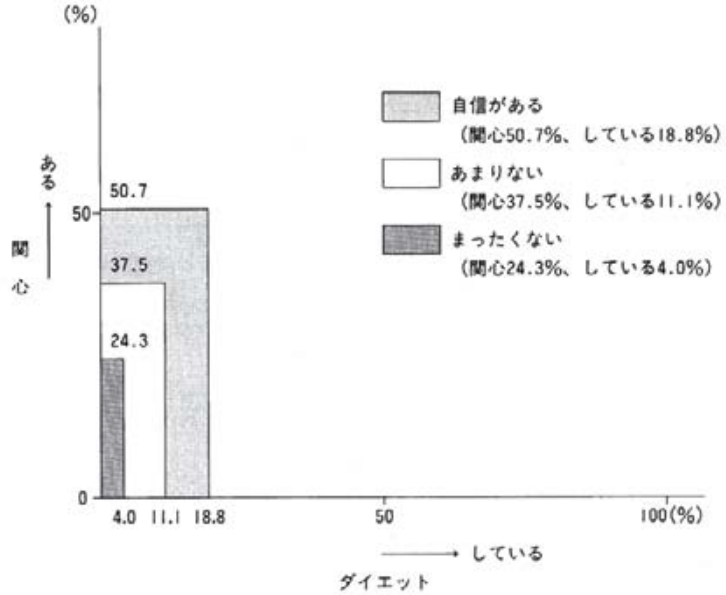


図34　ダイエットの方法

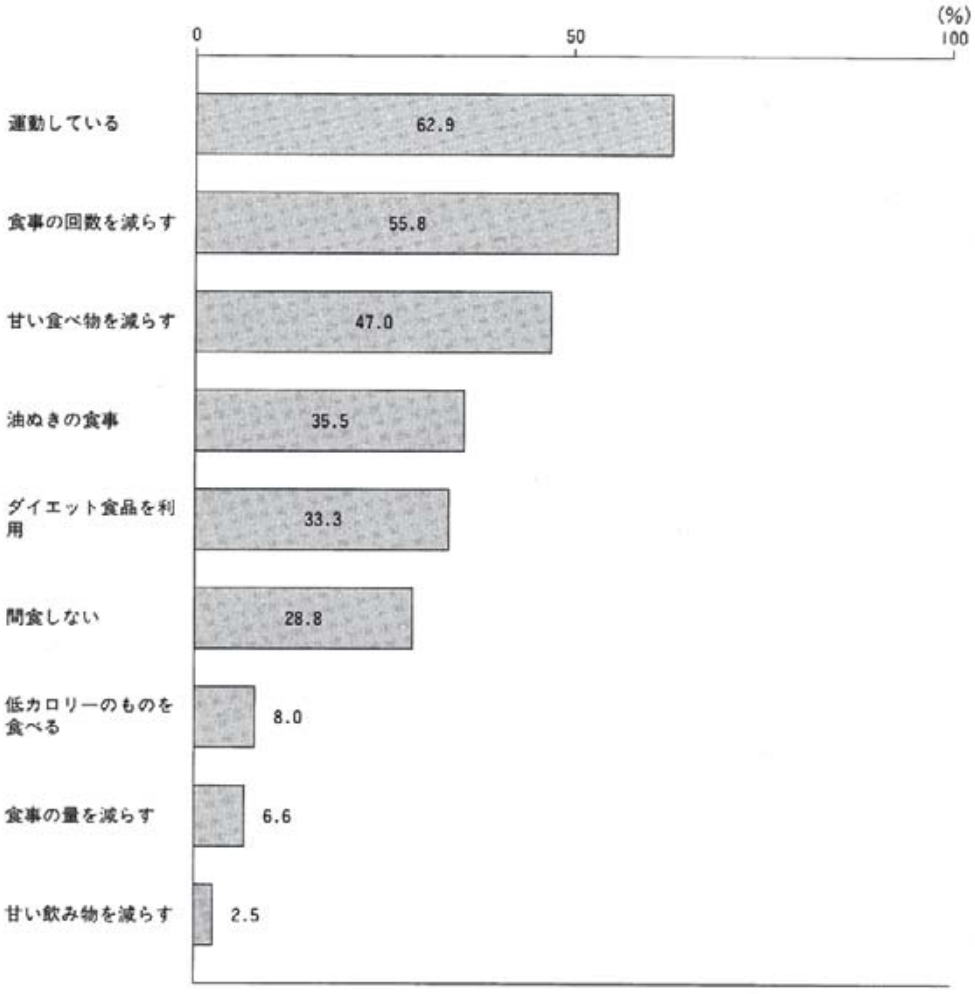
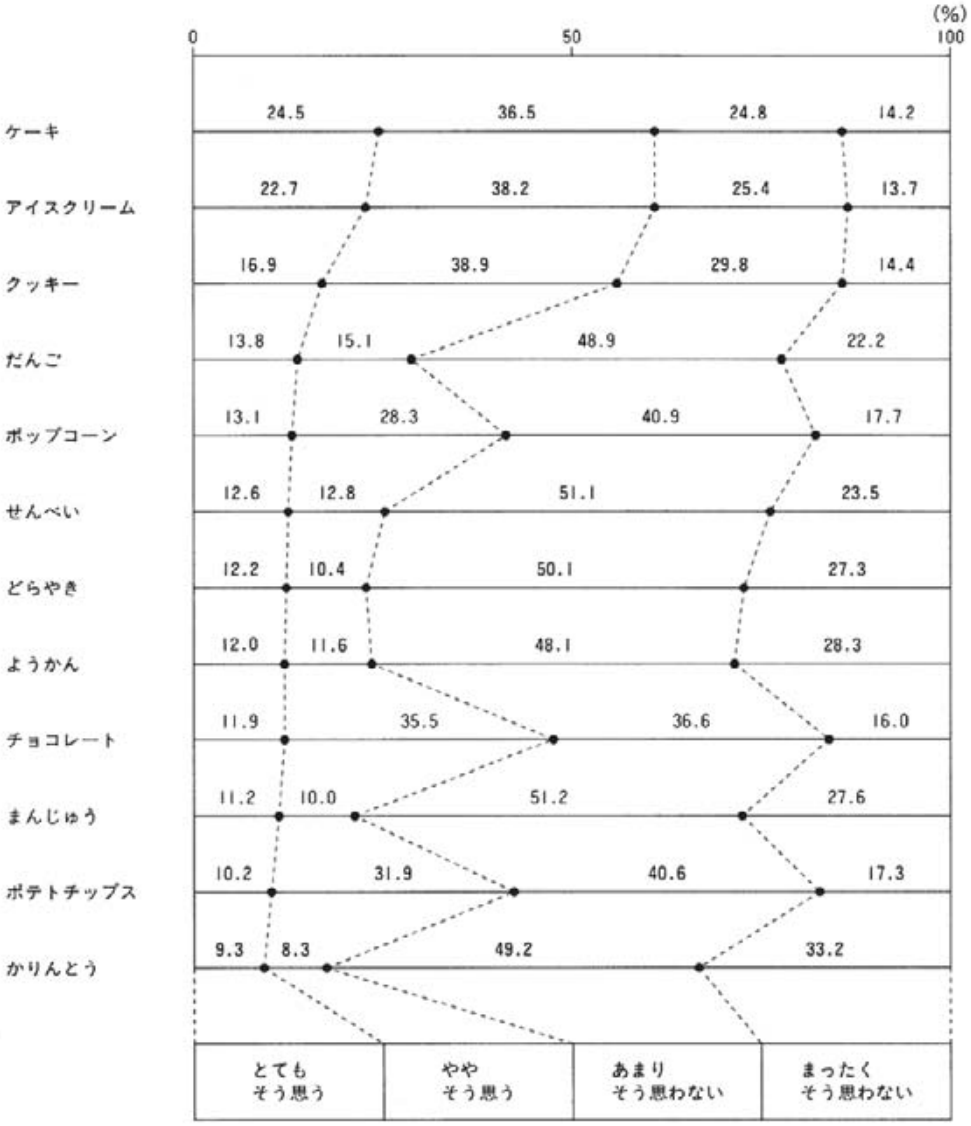


図35　おしゃれな食べ物



「おしゃれ」についてのメモ(2)

高校生とダイエット

岩田由紀子(放送大学卒業生)

私がこのテーマに興味をもったのは、仕事先のスポーツクラブでの、ある女子高校生たちとの会話からであった。

「本当に嫌になっちゃう。また1キロも太っちゃったから、今日は夕飯食べないんだ」

「あいつ、あんなに太っているのによく食べてんの。気持ち悪ーい」

「ダイエットしなくちゃいけないから、甘いものはいらない」

彼女たちは一般的に見ても、かなりやせている体型なのである。そして、当時まだ小学生でガリガリであった私の娘までが、

「学校で○○ちゃんがダイエットしてるって言うから、私もしてみようかな」

「給食、みんなあまり食べないのに、私だけたくさん食べたら恥ずかしいから残しちゃった」

などと言い出すにいたっては、これはちょっと問題なのでは？と思わざるをえなかったのである。

一番食べ盛り、育ち盛りでお腹がすいてしかたないはずの高校生時代。まして選手コースの水泳というかなりハードな練習をしている子どもたちの意識のなかに、食べることへの罪悪感のようなものがあるとしたら……、食べることを無条件で楽しめないとしたら……、これはとても不幸なことなのではないか。

改めて見まわせば、私の周りの30代・40代の女友だち、つまり彼女らの母親の世代でやせることへの憧憬は涙ぐましいものがある。という私もそうなのだが、実は一時、グループでエアロビクス、水泳、トレーニングジムと、ダイエットを意識してわたり歩いた時期があった。そこには、少しでも汗をしぼるべくサウナスーツに身を包み、一喜一憂しながらも真剣な女性たちの熱気が満ちあふれていた。遊び半分だった私はすぐやめてしまったのだが、子育てを一段落した後の、自分の中の母親以外の女性性を高めようというかのようなエネルギーには圧倒されるものがあった。

私は4年前、二つの高校1000人余にこのテーマで調査をしたのだが、その仮説の一つとして、「今の高校生、特に女子は自分の母親のダイエット志向にもかなり影響されているのではないか」「また自分の将来のようで、親が太っている子は特にダイエットを考えるのではないか」と考えたのは、このときの情景が、頭にこびりついていたからなのである。

しかし、結果はやはりマスコミ、友だちの影響がほとんどで、実際20%の親がダイエットをしているにもかかわらず、親の体型などにはほとんど無関心であった。つまりマスコミに踊らされている気分的ダイエットなのである。

このマスコミのやせ志向も、最近は微妙に変化してきている気がする。当時、工藤静香や中森明菜など本当に細い体型がもてはやされていたものが、鈴木保奈美や宮沢りえなど、少し女らしい体型志

向となっているのではないか。これが今回の調査の「やせすぎはカッコ悪い」の28.8%、「バストは大きいほうがいい」30.3%という数字に出てきているのだと思う。また男性の理想的体型として、「スリムなほうがいい」「がっちりした体型がいい」の2項目の支持が女子では前者、男子では後者と逆であったことは興味深い。

身体的自己像として、自分の体型をどうみているのか、についての結果は、前回の私の調査とほぼ同じ結果であった。特に女子で、やせぎみ以下、やせていると思っているのは、今回9.7%、前回10.6%とほぼ1割であり、また、太りぎみ以上、太っていると思っているのが今回52.4%、前回57.2%と5割以上いることになる。

これは、実際の体型がそうであるとは考えられない数字であり、実際の体重を理想体重との差で答えてもらった前回の結果と同様、体型の捉え方の歪みを指摘することができるだろう。また体型に対する満足度についても男子53.8%、女子82.7%がなんらかの不満をもつという結果も、4年前の男子53.8%、女子87.0%に対応している。これは高校生世代に共通した普遍的なものなのであろうか。

先日、ある大学の合格発表に偶然行きあわせたのだが、出てくる子のタイプがあまりにも似通っていて、一種異様な光景であった。同じようなスタイル、あごのない卵型の顔、長い足、同じような髪型……、みな一様にカッコいい。別にバンカラをきどるわけではないけれど、成長途中の「さなぎクン」たち。おとなになって変身する楽しみを感じさせてくれる野暮ったさが、もっとあってもいいのではと思うのは、オバさんのひがみであろうか。時給のいいアルバイトをして、ブランド物を手に入れ、食べることより身を飾ることに熱心で……、彼らにとっての本当のおしゃれって、いったい何なのだろう。

私は「食べる」ということへの意識にとてもこだわっている。食べるということは元来とても楽しみなことであったはずである。戦後のもののない貧しい食生活を小さい頃経験した人は、今も食べ物に対する執着が強いという。一方、ものがありあまり、いろいろなものに対する慢性の飢餓感はあっても、真の飢餓感を知らない今の子どもたち。彼らにとって真に生きるために欠かせないものと、遊びのためにほしいもの、両者の価値の区別は、本当にできているのだろうか。

彼らは食べることに関して、以前では考えられないようないろいろなタイプに分かれる。お菓子で生きているような子、その内容より、とりあえずお腹が一杯になりさえすればいい子、一日中何か食べていなければいられない子、小さい頃から少食で、食べることにほとんど関心のない子、まとめ食いなど食生活の不規則な子など……。私は今、水泳の指導をしているが、食の細い子はどこか活気がなく、動きが悪い。やはりどうしても、よく食べる子のほうが、心身ともに健康に思われてならない。

そこで、今の高校生が問題に思われてしまうのである。前回の調査で、食べることについて「たくさん食べた後、みじめになることがある」という項目に、女子の37.5%が「あてはまる」と答えたからである。一方、「たくさん食べたいしやせたいとも思う」「ダイエットしようと思ってもついつまみ食いをしてしまう」がともに8割。つまり、意識は高いのだが、その実行はおおむね徹底したものではないのである。ここがまた困るところなのだが、中途半端なダイエットは、より太ってしまうという結果を生みやすいこと

を、改めてここで指摘したい。戦後の飢餓感が食べ物に対する執着を生んだと同様、中途半端にがまんすることはかえって、肥満を呼んでしまうのである。ただでさえ脂肪がつく世代に、ダイエット地獄だけは注意してほしい。本当のおしゃれは「心」なのだから。

娘たちのおしゃれ

鈴木明美（放送大学卒業生）

子どもたちがまだ自分の意志で着るものを選べなかった頃から、子どもの洋服のコーディネートには人一倍神経をつかって育ててきた。というのも、おしゃれな着こなしのうまい女の子に育ってほしいという母親としての私の思い入れがあったからだ。

それには美的感覚や豊かな感性も同時に育てなければと思い、小さい頃から美術館に連れていったり、部屋に花を飾ったり、きれいな夕焼けを見せたりと、私なりに努力をしてきた。それなのに、子どもたちが思春期を迎え、自分のスタイルや髪型、洋服などにこだわりをもちはじめると、何となく不安な気持ちになってしまう。このままでよいのだろうか、おしゃれにばかり気を取られて学業がおろそかになりはしないか、心配の種は尽きない。

うちの子だけなのだろうかと思い父母会の折に他の母親たちに聞いてみると、ほとんどの母親が口をそろえて言う。「最近鏡を見ては髪の毛ばかり気にしている」「シャンプーをどれだけ買い替えたら気がすむのだろう」。男子の母親も「ムースの本数がやたらと増えて」と、どの母親も子どもたちの異常なほどの髪へのこだわりにとまどいを感じているようだ。ある母親は、「うちの子は歯みがきとお風呂ぎらいだったのが、最近は朝晩歯をみがくし、毎日お風呂に入るのよ」と言っていた。

中学生にもなると、どの子も自分を意識しだすし、おしゃれにも目覚めるのだ。と同時に、他から見える自分自身、つまり友だちは自分をどう見ているかも意識するようになる。

手軽に朝シャンができるシャンプー台付きの洗面台がブームになったのも、おしゃれに目覚め始めた中高生のニーズに応えてということである。今や中高生のおしゃれ感覚が業界をも動かす時代になってきたことは確かだ。

早朝、電車に乗ると、洗いたてのシャンプーの香りを漂わせている高校生に出会う。どの子もサラサラツヤツヤヘアで、少し前まではどこにでもいたニキビ面の汗くさい高校生はあまり見かけなくなってしまった。

中高生の多くは、きめられた制服があり、私立高になると、カバンやクツ、クツ下まで指定されている。そんな彼らが唯一自己表現できるのがヘアスタイルなのだ。それに費用もそれほどかからないし、彼らの小遣いで十分まかなえる。もちろんそれだけではない。彼らは臭いに敏感な年頃であり、清潔志向なのだ。

あるとき、こんなことがあった。長女が某私立高に入学して間もなくのこと、学校から帰ってくるや否や自室に閉じこ

もり制服を投げ捨てて、「もうあんな学校には行きたくない！」と言いながら声をあげて泣いている。驚いた私は、わけを聞いてみると、髪の毛のことで注意をされたらしい。娘はどの子もしているように朝シャンをしてドライヤーで型をととのえていただけなのである。母親の私の目から見ても決して変に技巧的なヘアスタイルをしているわけでもなく、ごく普通の高校生の姿なのに、と思ったが、どうやら少しクセ毛のせいか、わざとウェーブさせていると見られ、それが先生には気に入らなかったのだ。その晩、ふにおちないまま、私は娘の髪にハサミを入れた。娘はショートヘアのあどけない姿になり、翌日、何もなかったかのように登校した。以来、先生からは何のクレームも出なかった。

おしゃれ心が芽生え、母親におしゃれ上手な子にと育てられた娘が唯一ヘアスタイルに自由を求めて、自分に一番似合うと思ってしていたヘアスタイルも校則や権威の前では、そんな主張すら通らなかったようだ。

私は10年ほど前入院したことがある。約1か月の入院であったが、その間ナースの「シャンプーしましょう」の声には耳を貸さず、医師の許可を得ては地下の美容室でシャンプーしブロー仕上げをしてもらっていた。病人なのだからおしゃれしても仕方がない、という声が聞こえたが、化粧もできず一日中パジャマ姿でいなければならない。だからこそ、唯一自由が与えられている髪くらいはきれいで自分の納得できる形でいたかったのである。

そのときの自分を思い出し、どこか校則と制服に縛られている高校生がヘアスタイルに自己主張を見いだそうとしている姿と似ているような気がした。

そんな娘も大学生になり、うず高く積まれていた参考書の山が消え、おしゃれに関する情報誌が何冊か見られるようになった。高一の妹はブランド志向派で、英会話スクールへ行くにも塾へ行くにも着がえをして出かけていく。二女のブランド志向はソックスから始まり、ポロシャツ、セーター、ジーンズと広がっている。二人は雑誌を見ては、どこそこのTシャツがいい、クツはどれがいいと言い、かわいいからと私が買ってくる服には目もくれない。

しかし、そんなブランド品の品定めをいくらしたところで、それを手に入れることは、それほど多くはない。なぜなら、ブランド品は値段も高いから、おいそれとほしがるままに買い与えることができないからだ。

絵心があり、感性の豊かな二女はおしゃれもなかなかうまい。自分では数は少なくてもDCブランドのものを買い、他は姉のものをうまく利用して、自分なりのオリジナリティーを出している。彼女はまた、同じ服を同じ友だちと会うときに二度と着ていかない。友だちの目を多分に意識しているのだ。友だちに自分をどう表現するか、どう見られたいか、自己表現に苦心しているように思える。

ふと気がつくと、長女がどこに行くにもジーンズかパンツをはいている。なぜスカートをはかないのかと聞くと、足が太いからだと言う。それほど太いとは思えないので、そんなことはないと言っても、いっこうにスカートをはこうとしない。こんな足でスカートをはくなんて許せないのだそうだ。自分で自分の体の一部である足の太さが許せないとはどういうことなのだろう。そう言えば、雑誌には必ずボディコンシャスに関する特集が組まれている。聞くところによると、みんなそれなりにビールビンを使ったり、ラップを巻いて発汗させたりしてやせる

ことへの努力をしているようだ。

ヤセ願望がこうじて拒食症になった例もある。これも自分の体型にがまんができない、娘の言う、自分が許せないということと同じなのかもしれない。

おしゃれの本質が自己主張だとするなら、主張する自己をもう一度見つめ直し、もっとすばらしい自分になるために磨いてほしい。おしゃれに目覚めることは社会に目覚めることにつながり、センスアップしていくことは自己の自信にもつながる。磨かれた個性は、それだけで説得力をもつものであると私は思う。

おしゃれと自己主張

尼子孝子（放送大学卒業生）

規格外高校生

先日バスに乗っていた時のことである。なんとも異様な光景に出合った。

下校途中の詰め襟の男子校の生徒が、数人バスに乗り込んできた。そのうちの１人が座席に座ると、すぐにポケットから何やら取り出した。小さなピアスであった。小指をたてて、１つ１つを丁寧に親指と人指し指でつけていた。少し前なら、そういうしぐさは女性がやっていたことだろう。人前でも憚らず、慣れた手つきで、４つのピアスを片方の耳につけていた。廻りの生徒も驚く様子を見せずに話をしているところを見ると、この生徒にとってはいつものことなのだろう。学生服にピアスというスタイルは、私はまだ格好いいとは思っていない。これまで見たことがないからよくないというつもりは毛頭ない。ただ学生服自身ホコリっぽくて清潔でないと思っている私には、どこのラインで服と耳の飾りがマッチするのか、理解には少し時間がかかりそうだ。理解はできないということと不快に思うこととは必ずしも一致していない。いずれにしろ男女差がなくなってきたことを感じる。

思えば、私が高校の頃（20数年前）もパーマは校則で禁止であった。当時、私はテニス部であった。１年の時は、基礎体力と言われ、腕たて伏せやランニング、ボール拾いの記憶が多くある。コートを走るとき、長髪は顔を覆いジャマであった。また、学年の水泳合宿もあって水に濡れた髪が目にかかるととても不快であったので、髪はショートカットでゆるやかなパーマをかけていた。こうしておくと他の女子生徒のように、いつも髪を気にしなくてよかったし、ヘアカーラーで毎日巻くようなこともなかった（当時は毛先をカールするのが流行だった）。頭髪は洗いっぱなしで、天然乾燥でよかった。犬が濡れた毛をブルブルと首を振って乾かすような感じである。おかげで３年間くせ毛ということになってしまった。

私にとって都合のよいこの状態は明らかに校則違反である。だからといって自分自身をみて不良だったとは思わなかった。クラスの委員も３年間やってきたし、全校の委員長もやってきたから、他の人もそのように思っていなかったようである。

また、先輩の男子生徒のことである。当時男子の制服は詰め襟であった。彼は

よく第１ボタンをはずしていた。ある時先輩と廊下で立ち話をしているときのことである。その襟元からのぞくセーターが真っ赤だった。その時、その場ではショッキングな色だった（大半の生徒は黒や紺のセーターを着ていたのである）。記憶にある中では全校に１人くらいであった。ヘアスタイルはコテコテではないが、髪の毛を後ろへ流していた。オールバックで、アイパー（アイロンパーマ）をしているとのことだった。アイパーなる言葉を聞いたのはこの時が始めてだった。なんとなく、この人は変わっていると思った。自分のことを棚にあげての私の偏見であった。

卒業後、数年して同窓会のことで彼から電話がきた。近況報告によると外資系の一流会社に勤めていた。役職も得て、仕事も面白くこなしているようだった。「自分が求めていたところは、こういうところだった」といっていた。当時の彼は自分を生かせる場所や物を模索していたのだった。単純にたいしたものだと感心したものだった。

すると私の人の見方や校則はなんだったのだろうか。自分を少し主張すると校則の壁につきあたる。校則のみを基準としてみると偏見をもたらすこともある。自分のライフスタイルに合わせるとすればするほど、窮屈になってくることもある。

アメリカの高校生の髪は

以前、主人の仕事の都合で家族でロサンゼルスに在住したことがある。その時の地域の高校のことである。言うまでもなく、アメリカ人に加え、ヨーロッパ、南米、東南アジア、中東と様々な人々が混ざっている地域である。授業が終わると生徒が教室から溢れ出てくる。この光景はどこでも変わらないのであるが、日本と違って見えるのは身体の大きい人や小さい人の頭に生えている毛が、黒い髪、茶色の髪、金髪や、我々には白髪に見えるほどのシルバーブロンド、オリーブカラー等々、向こうの人にはもっと細かくあるのであるが、とにもかくにも色様々である。髪の形状ともいうべきか、ウェーブの形も様々で、ウェーブだの、ソバージュなどどころではない。チリチリ、くるくる、さざ波のようなものからゆるやかな波と天然の波がうずを巻いているようだ。近くのいくつかの高校でもナショナリティの混ざり具合の違いこそあれ、色とりどりには変わりがない。

おまけに男子生徒は髭をはやしている子がいて、見なれないうちは少々異様であった。身体が大きい生徒はおじさんみたいに見えるし、気の毒なくらいちょぼちょぼの髭の子もいる。はやしているというより、この場合は不精髭ではないかと思われる。身体が小さく童顔の生徒で髭だけ立派な生徒もいる。毎日毎日その顔を見続けていると、その髭がその人の一部であり、髭を取った顔が想像できなくなるから不思議である。

とはいうものの高校生はまだまだ、ティーンエイジである。髭をはやそうが、ピアスをつけようが、とまどったり、照れたり、笑う表情や行動は10代である。こうなると高校生らしさなるものをもう一度考える必要がある。

おしゃれのルーツ

それでは、高校生だけが清潔願望を抱いているのだろうか、清潔なおしゃれのルーツを求めたくていくつかの資料をあたってみた。

江戸の昔から粋なおしゃれというと江戸七不思議の一つ八丁堀の女湯の刀掛け

がある。同心や与力が朝の混んだ男湯をさけ、女湯に入るのである。また、朝風呂には遊び人や隠居が入っていたというし、昼には寺子屋から帰った子が入り、日没には職人や商人が入っていた。江戸っ子は身体が赤くなるほど熱い湯に入り、サッと出てくる「カラスの行水」というのがシャレた風呂の入り方であった。実際私の子どもの頃もぬるい湯にゆっくり入るとヤボだといわれ、「エーイ、江戸っ子だ」といいながら息をころして熱い湯に入った。今ではそんなバカげたことは健康によくないということをだれでも知っている。

それでは、だれでもきれい好きで風呂に入るということがあたり前のように思われるが、同じ時代でも国民によっては大いに違う。例えば、北山晴一著『おしゃれと権力』によると、19世紀のパリでは、汚物を公道に捨てるのはあたり前で悪臭に満ちていたといわれる。また「平均入浴数は年２回ほど」でパリの市民の大半の入浴数はゼロに近いと述べられている。理由として第１に入浴料が高かったことと、入浴など必要と感じない生活様式をつくり、「体を洗うこと」を軽視する風潮をつくりあげたのである。

これに比べると江戸の庶民はかなりのきれい好きというか、風呂好きであった。庶民が手軽に風呂（銭湯）を楽しめた理由は、入浴料にもある。今野信雄著『江戸風呂』でも唐茄子１個分でほぼおとな４人と子ども１人が入浴できたとあり、稲垣史生著『思えば江戸は』によっても、「庶民は一日二百文の生活だが、しじみ売りでも午前中にそれ位の稼ぎがあったので……」とある。安価である。中に日に何度も入浴をした人もいたという。身体の清潔と生命の洗濯である。

おしゃれの規格化

今の高校生は自分自身を清潔にすることに一生懸命である。ツルツルお肌にサラサラヘア、男の子も女の子もである。だれがアイドルタレントになってもおかしくないほどきれいで、可愛いお坊ちゃまとお嬢ちゃまである。自分なりの個性に磨きをかけているはずである。しかし一時はやった人形で「キャベツ畑の○○ちゃん」という人形を思い出す。１体１体の人形の顔や洋服が違うというのが売り出し文句であったが、ベースが同じで少し多くの人形をみているうちにみんな同じ顔にみえてくる。今の高校生も少し離れてみると同じにみえるのは何故だろう。

こうして考えてみると大半の生徒は同種類であると思えるが、今も昔も変わった高校生がいた。「自分らしさ」「個性」とかいうものを、服装や髪型で表現することがあるとすれば、時として規範の枠はジャマになることがあるのではないだろうか。あれやこれと模索し、試し、失敗したり、成功したりしながら、自分のものを創りあげていくものではないだろうか。社会に出る前の時期に試行錯誤をするのもよいのではないだろうか。

時代、地域によっておしゃれ感覚も違う。その時代に合ったこと、つまり、その時代に生きている人が考え生み出したもの、生活環境を考え、もてる能力の中から生み出したものであるなら、試みる価値はある。おしゃれは自由がよい。自由に考え、自由に表現できるから、自分のおしゃれである。他人の考えたものを鵜呑みにしてばかりでは、新しいものや個性は出てこないのではないだろうか。